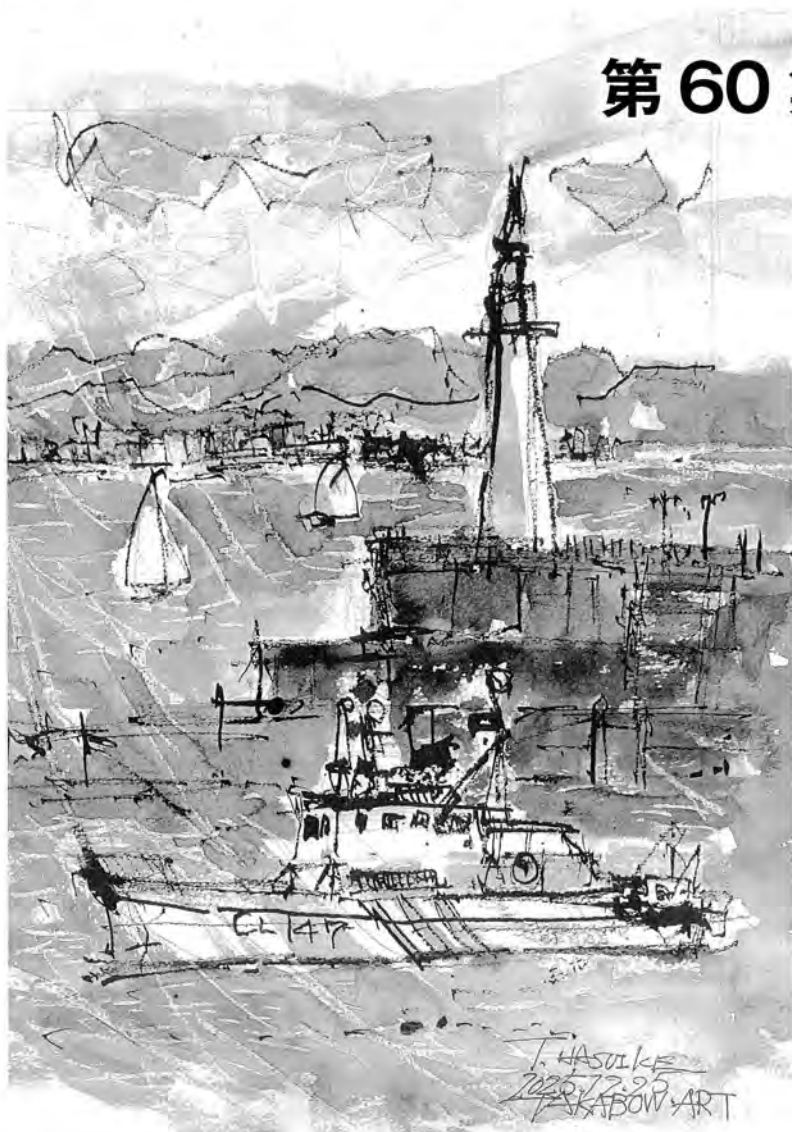


2026年

文芸ふじさわ

第60集



表紙のことば

海に生きる

風も冷たく、気温も低い12月的一天。

東浜から江ノ島を望む。左端に長く突出した突堤、その先端にポツンと見える灯台。

さて島の中へ、江ノ島ヨットハーバーの右側に長く張り出した松林、松林を過ぎると栄螺島だ。

ここから見える灯台、その下に係留されている海上保安庁の巡視船、この風景が本日のテーマだ。

これらは私達を含め、海と海に生きる人々を見守っている。

翻すと海を大事にし、海を守ることが、私達の使命でもあるように思える。

岩壁の先端でじっと海を見る。広い広い、本当に広い、果てのない広さ、そして深さ。海は青く黒く深いプルッシャンブルー、じっと見つめていたら、一瞬海の中へ引きずり込まれそうな錯覚に襲われた。ハッと気付いて、思わず冷たい手摺りにしがみついた。

背すじに冷たいモノを感じ、我に返った。

海は怖い、本当に怖い。

海は魔力を持っている。まさに魔の力と言うべきだろう。

海に生きる人々の安全を心より願う。

2026年 正月

絵と文 蓮池高夫

文芸ふじさわ

第 60 集

目次

表紙のことば

「文芸ふじさわ第60集」によせて

俳句	7
短歌	51
川柳	63
五行歌	81
現代詩	93
随筆	103
編集後記	154
サークル紹介	160

「文芸ふじさわ第60集」によせて

藤沢市長 鈴木恒夫

「文芸ふじさわ第60集」の発行を、心よりお祝い申し上げます。「文芸ふじさわ」は、市民の皆様から寄せられた短歌、川柳、俳句、五行歌、現代詩、随筆の作品を掲載しており、多彩な作品が織りなす豊かな表現は、読者の心を深く惹きつけております。地域の文化を育み、創作の場を提供する貴重な文芸誌として、長年にわたり親しまれてきた本誌は、今回、第60集という節目を迎えました。市民の皆様のご熱意ある応募に支えられ、本市の豊かな文化活動を映し出す一冊となっております。

文芸に親しむことは、言葉を通じて自己表現を深めるとともに、心の豊かさや感受性を育む大切な機会です。短歌、川柳、俳句、五行歌、現代詩、随筆といった多様な文芸形式に自由に取り組むことで、言葉の持つ力や美しさに触れ、創造的な思考が広がります。これらの活動は、個々の感性を磨くだけでなく、他者との共感や交流を促進し、地域コミュニ

ニティの絆を深めることにもつながるものです。

さて、本市は昨年4月、市政の羅針盤となる「藤沢市市政運営の総合指針2028」を施行いたしました。めざす都市像は引き続き「郷土愛あふれる藤沢―松風に人の和うるわし 湘南の元気都市―」であり、「みんなが大好きと思える藤沢」「誰もがやりたいことを見つけられ、実現できる藤沢」を実感することができるようまちづくりを進めてまいります。文化芸術は市民生活の質を高め、地域社会の活力を生み出すものでありますので、今後も多様な文化活動を支援し、本市をさらに魅力あるまちへと発展させてまいります。

結びに、「文芸ふじさわ」に作品を応募してくださる多くの文芸を愛する皆様、編集に携わる編集委員の皆様、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。皆様の情熱と努力があつてこそ、この貴重な文芸誌は長きにわたり発行を続けてこられました。これからも「文芸ふじさわ」が市民の創作意欲をかき立て、地域文化の発展に寄与していくことを心より願っております。

俳
句

青木敏行

(サンシャイン)

地球裏の戦火の匂ふ蟬の穴
揺すぶつて木の実を落とす猿の親
横浜やスーパークレーの姫キャベツ
風光る投手の少女髪束ね
出目金のひらり耀ふ黒曜石

青柳白芳

(魔)

江の電や軒先抜けて春の海
いつからか空家となりしリラの家
秋涼し猫とピアノと暮す家
水鳥の煌めく水脈やちぎれ雲
歳旦や鳥居に見えし白き富士

青柳佑美

(xib)

蓮の実やひとりを選びひとりをり
実ざくろや靴音ひそむ素描展
薄くなる父のそびらや洗ひ飯
フェラーリの初心者マーク夏の海
籐寝椅子ラフマニノフに沈み入り

阿部和代

年賀状変らぬ文字の友想う
冬晴れて同窓会は宇佐参り
紫陽花や坂の途中の能楽堂
三尺寝空調服のモーター音
短夜やオーディオブックの菊之助

阿部政子

彼岸詣木洩れ日掬ふ柄杓かな
無くしものポケットにある更衣
尺蠖の尺のチクタク立ち話
送り主代替りして新米来
寄せ植ゑの施肥のふかふか冬ぬくし

あや子

観測船「しらせ」戻るや秋の海
（みちくさ）
海浜の紅きコキアや秋深し
墓に沿い守るがごとく曼珠沙華
歌仲間百歳前に逝く秋さびし
ずっしりと郷の新米届く朝

有井悠木

（x's）
山眠る幾万年の先もなほ
地球儀の残された部屋春の閑
いつまでも手水に浮かぶ花筏
くすみゆく生家を囲ふ蔦若葉
宇宙より粒子降る夜山法師

生田暁美

（鷹）
山桜快気祝ひの膳寧き
冷房車国の解らぬ言葉きく
もぢずりや遊具にあがる子等の声
電柵に等間隔のとんぼかな
青鳶や父の時計のよみがへる

一柳はるみ

（x's）
身ほとりに彩をふやして三月来
せせらぎの音を集めて猫柳
樹の窪にたまる甘露や鳥の恋
なべてみな老いてよき貌春の風
髪切つて風切つてゆく立夏かな

伊藤しおり

（s's）
よく眠る猫に初夢尋ねけり
子がちぎるつゝじの蜜や指に春
蟬取紙まぬけにゆれてゐるばかり
墓洗ふ爪に残れる苔青し
冬田道舌にてなぞる糸切齒

稲垣正晴

（x's）
嘘じみて本音告げけり四月馬鹿
落ちながら風捉へたり巢立鳥
ウェブ会議画像をオフに目借時
蛸や悲し悲しと聞こえけり
蟬の羽振り回したる蟻の顎

今井美恵子

（波）
忘るるといふも癒しか初昔
清方の女人に逢へり春しぐれ
三叉路やわれを見捨てし道おしへ
影取とふ地名は寂し暮の秋
小寒や町から消えし夜鳴蕎麦

居山 勝

(天為湘南)

新学期蹴る音止まぬ逆上がり
釜茹の地獄絵見入る炎暑かな
赤とんぼ群れて青空押上ぐる
炎炎と小径形どる曼珠沙華
片時雨石碑一つの渡し跡

岩田 かつ子

(あら)

朝採りの野菜を貰ふ麦わら帽
秋立てりポストに文の来たる音
枝豆や無口と下戸の二人酒
ふるさは豊の秋らし宅急便
新米を掬へば両手仄温し

岩谷 明子

(茶すみれ)

春一番砂蹴散らせば砂光る
風光る未踏の八十路ゆつくりと
ボサノバのテンポに吹かれ夏の蝶
玉虫の死しても輝き放ちおり
凜として秋天を突く大樹かな

上沢 洋子

(あら)

短夜やジグゾーパズル1000ピース
釘打てり終の棲家や夏帽子
ひやむぎにこだはりのある人と居て
書店より届く新書や秋立てり
新しき靴を買ふなり涼新た

植田 稔

上野 美恵子

(湘南アカデミア)

花火の音風乗り継で我が家まで
秋の庭虫音混りて虫籠なり
金木犀ひっそり広がる坐禅堂
デコレーション避けて匙差す氷水
目に染みる茄子の糠づけ朝餉皿

長き夜や風頬をなで樹々の中
小鳥飛び風の音聞く高き空
黒葡萄ひかり集めて輝きぬ
ひと粒のどんぐり拾うみちすがら
星一つ大きく流れ谷の中

植田 裕子

上松 マリ

(あら)

(天為湘南)

極月や朝の尾根道吾ひとり
太平洋へ自転車の列初日の出
草の間にとびとび光る春の雪
昼寝より醒めて泣く児や花曇
青胡桃児の帰り待つブラレール

拍手連れ風切る走者三が日
強東風や原爆ドームが凜と立つ
雨あがり辛夷が空へつんと向く
術後の夫うす目の笑顔梅雨明くる
水突つくおんぶ蜻蛉は太古から

占部 美土子

(はまべ)

蜻蛉やランドセルの子走り出す
夕日背に空の広さを渡る鳥
千代紙の花びら散らし障子貼る
金秋や加賀友禅の筆さばき
現し世の涙の色か曼珠沙華

江口 文子

(天為湘南)

冬日差す図書館で読む旅の本
神妙にどの子もしかと屠蘇祝ふ
コーヒー店ふはりやさしく雛飾る
静けさや空をうめたる藤の花
老いてなほ推しの情熱夏芝居

オウミ タカリン

紡ぎ折エメラルド婚実万両
行つて来ます健気な孫や風光る
妻入院憶念の心炎暑かな
朝食の後の一睡夏に克つ
熟帰り孫のただいま月涼し

大木 保幸

(かるがも)

巳の年や六巡の身にお元日
年年にさくら相似て生きにけり
露の葉をそつとめくりて茎ほそし
新涼やドローンたちの光る星
また今年マツバボタンの色あふる

大久保 啓子

(たけのこ)

夏帽子少しななめに街に出る
木の芽風やりたいことでも探さうか
春雷の身構へる間に終りけり
秋思ふと夫なき日々の過ぎしこと
降り止まぬ落ち葉の中にただ立ちて

大山 賢太

(みちくさ・かわせみ・かるがも)

百日紅空向き咲けり薄紅に
サクサクと甘く真つ赤な西瓜かな
鳳仙花庭の片隅赤く咲き
秋桜赤白黄色咲きにけり
秋の蜂すべて落とすや去る憂い

大平 雅芳

(さら)

新幹線石火のごとし四月逝く
感嘆子湧くごとと蝌蚪の生れにけり
二部合唱新樹の風を膨らます
帰省子に島のゆふぐれ長きかな
裸木の高々とあり農学部

大山 美和子

(さら)

嬰兒のそのままを抱く春セーター
黒髪の三つ編み揃ふ聖五月
ひとり言多くなる日や更衣
足指の掴む大地や夏休み
人肌の煎茶二杯目今朝の秋

岡本 泉

(鷹)
ギブス巻く足持て余す夜長かな
汀女忌や色佳き柿の一葉手に
ヨコハマと聞けば船旅いわし雲
幼児にはじめての匙寒明くる
風光る髪染の色明るめに

沖石 讃岐

(草)
瓜漬のそれぞれにある隠し味
まつさきに母が噎せたり麦こがし
泉殿に平安の世の水湧きぬ
陶枕や夢に関羽の怒り貌
卓袱台を廊下に出して蚊帳を吊る

小田 徹夫

(草)
読みかけし本平積に春炬燵
シヨベルカー砂掘る浜に夏来る
留守電の流るるままに昼寝かな
父の日や看取り介護と言ふうつつ
一徹を守り今日あり冷奴

男 波 弘 志

(草)
鯖缶の中の鯖の身花曇り
喉と喉花の冷たさまで歩く
また父を死なせる忌日春障子
あとがきに全く碧い蛇がある
八月の水に手を置くいつまで置く

加藤 静子

(はこべ)
水茄子やさくつと裂いて辛子つけ
ほめて飲む新そら豆の茹で加減
谷中生姜まづ一本は味噌つけて
夏料理グラスきりと冷やしをく
母のひと世いく度茹でしほうれん草

加藤 七海子

(草)
門口で豌豆貰ふけふは晴れ
白南風や父が吾子抱き宮参り
子どもらの声消ゆる午後油照り
片陰を地図を片手の同期会
声上げてねずみ花火と走りたる

金井 詩子

(波)
幾山河ふるさと後に春の雪
見張台残して浜の夏果つる
一口のワインに足りて春の宵
星一つ残して隅田の遠花火
最上階住みてちちろの初音かな

金子 真悠美

(天為湘雨)
黒塀の路地の静けさ雪柳
ふわり揺れとろり香るや藤の花
青楓乳飲み子の瞳の清かなり
シニヨンの首筋に風夏柳
吾亦紅自由気ままなひとり旅

金田 美保

(かるかも)

ふきのとう友より届き天ぶらに
花万朶調律のあとセレナーデ
昨夜の雨手袋はめて草をとる
金色のイチヨウの葉っぱや風にまよう
父母思う遠くていけぬ墓まいり

神谷 章夫

(つら)

妹の音に踏まるる薄氷
往來の人を数へる春炬燵
いつ終はる鉄道唱歌山笑ふ
詩人あつまる藤沢の目借時
あめんぼの水輪のあたる亀の首

亀倉 美知子

一人ゆく聖ヶ谷^{じじりがやと}の百千鳥
早蕨や産着にのぞく固こぶし
さくら咲く校門は今朝日本晴れ
民草の二十万の名沖繩忌
ふるさとの井戸辺のたらひ夕焼空

河村 笑

(鷹)

落第横丁抜けて菊坂冬ぬくし
梯子乗倒立に空張りつめる
雑踏に紛れず夫の冬帽子
薬苞を湿らす雨や寒牡丹
もてなしは庭でバエリア春隣

河村 青灯

(鷹)

春さざす島の隘路の配達員
人知れず弁慶塚に花過ぎぬ
朝霧の消ゆる端より水芭蕉
名月や告げにゆきたし見てゐたし
冬帽を上げ夕富士の暗むまで

草柳 節子

(天為湘南)

春一番日陰の草の円舞曲
いつのまに蔦の色づく坂の家
味噌汁の今朝は大根の香り満つ
芍薬や手品のカードわき出づる
くらやみにいく度寝返へる薄暑かな

窪田 寛

(つら)

鶴沼や花のあふるる裏通り
通るたび心の糧に桜みち
年取りて八十八夜もただの夜
夏至過ぎて色の溢るる街の中
曇り空紫陽花の紺目を奪ふ

熊倉 弘幸

(さら)

雨垂れの音を聞きつつ鰯焼く
田舎道草の香渡る走り梅雨
麦藁帽押さへて渡る青信号
由比ガ浜の辻の息かき水
津波警報駅の混乱油照

熊倉美紀

街路樹の根元半畳土筆生ふ
長餅の日永の地より運ばるる
いにしへの強さ織り込む藤布かな
緑蔭を選ぶ買ひ物の老女かな
植木鉢三軒先に野分晴

黒田美佐子

春蟬の大音量に目覚めをり
この一歩からと伊能の初夏の庭
亡き友のなほ偲ばるる遠花火
蚊遣香朝一番の庭仕事
七夕や多羅葉の葉に思ひ込め

小出玲子

合歡の花碧眼の僧バス待てり
変体仮名揺れて紺地の暖簾かな
地下鉄の出口間違へ大西日
立秋やカレーの味を少し変へ
川に手を合はす人ゐて終戦日

光宗すみれ

花冷えや着信音は薄紅色
薔薇咲くやレンガ塀より愛の詩
頬よせて母まばたきし合歡の花
揚羽蝶ひらりあらはれ宇宙に去る
布に風灯籠みちは夏の夕

小高秀則

神棚の軍手勤労感謝の日
調弦の弛むウクレレ梅雨曇
イルカショー水平線に雲の峰
文庫本携ふ土手の花吹雪
博物館裏に陣取る花見哉

小堀公美子

初芝居はねて銀座の灯かな
手付かずの遺品に暮色花海棠
蜜豆やとつぷり暮るる木挽町
秋彼岸木魚の醸すフォービート
大芭蕉実りたわわに枯れゆくか

小林美知子

蹲に山茶花散りて水動く
群青の空いつばいに辛夷咲く
枝枝の木の芽開きて空近し
南風吹き湖面の富士を散らしけり
問ふように鹿とどまりて見つめをり

小松原キイ子

故郷の変はらぬ匂ひ星月夜
子鼠の跳びだす絵本秋ともし
氏神の子供太鼓や初御空
寒戻る入浴剤のシユワシユワと
百合つばみ紅を透かせる枕花

小山 晴湖

(五五)

せせらぎの魚影くつきり草萌ゆる
急ぎゆく翁リユツクに桃の花
コラージュの軽き指先春さざす
摘草や母は童にもどりけり
参道わき和尚ひとりの茶摘かな

小山 美保

(みちくさ・かるかも)

風鈴の鳴る音耳元心地良く
薄暑来て早もや半袖若人ら
さくらんぼ添えて美しサンドイッチ
苺食べ練乳の中泳ぎけり
墓参り久方ぶりが線香そえ

齋藤 まり江

(波)

蒼穹を背負う社殿や初詣
高麗山は母の思い出春霞
十三夜心の中まで透きとおる
せせらぎやきらきらと紅葉散る
冬落暉坂の向こうの染まりゆく

佐々木 順子

(湘南アカデミア)

空蟬は羽化を觀た子の宝なり
青鷺の啼く大樹より夕迫る
三線の暗夜にひびく沖繩忌
色鳥や廢墟にのこる百葉箱
かなかなかな折りの空にひびく声

佐藤 美津子

(天為湘南)

二人居のゆるりゆるりやあやめ咲く
一坪の畑賑はふ夏野菜
鳩時計秋の光にぼぼの音
冬雲や眼鏡にルーペ重ねをり
読みかけの本を仮置き年の暮

佐野 健

(五五)

園児らの顔が並びぬ花御堂
初つばめ雨脚を切る翼みせ
鶯の高音はしばし空にあり
義経を名に負ふ白き藤咲けり
水割りの氷ぐらしと夏さざす

佐藤 よつば

(五五)

麦秋の故郷の味も忘れけり
那智の旅瀧に疲れを落としけり
急登や陽に近づけど風涼し
東西の鰻の味にこだはらず
帰宅後に父と並んで月見豆

佐野 典比古

(五五)

春灯や文机にある己が影
うららかや土塀に曲がる松の影
消しゴムの先端で消す朧月
セロファンに月包みをり春惜しむ
触れ合うて音の鳴り出す小判草

塩崎 琴

(しら)

初恋のペールを脱いで黄水仙
奥谷戸の芹幼きを摘みにけり
新涼の水を供へて山の神
蔵の隅に残るラヂオや終戦日
中庭に池ある母校ひつじ草

篠崎 路子

身内とふ言の葉ゆかし秋桜
指折りし秋の七草五つほど
文化の日日ボ語と達者とふ孫二人
秋うらら孫摺り体験浮世絵館
一遍忌さわやかな人と一会かな

篠田 清秋

(かわせみ)

初日の出江の島見つつごみ拾い
夏の夕「恋は水色」子と聴きに
海の日や市長と浜のごみ拾い
天高し浅間山見て露天風呂
障害者とスポーツの秋ボッチャ戦

篠原 広子

(しら)

つつつと指触れて行く猫柳
繰り返す朝のエチュードすみれ咲く
やあと来てじやあと手を振る立夏かな
桑の実のほろほろ幹の大曲り
パセリ刻む母の鼻歌めづらしき

柴田 美智子

(しら)

手作りの風に抗ふ夏帽子
夏帽子後ろ姿の若く見ゆ
蟬の穴数多あれども蟬鳴かず
無人駅何かしつくり花カンナ
一山の一切あつめ滴れる

島田 昌子

(一葉)

我が名前忘れし人へカーネーション
極楽極楽母の口ぐせ水蜜桃
石蕨咲くや母の一生語られず
絶筆の梅一輪の日記かな
夕顔や「寅さん愛」の叔父逝きて

柴山 洋

(しら)

漁師町はや寝静まる五月闇
蠅叩き持てばそこらに蠅居らず
麦藁帽斜塔のごとく積まれをり
墨堤の風に冷ますや泥鰌鍋
喪の家の静かな縁を蟻歩く

清水 誠

(むかこ)

初参り駅伝駆ける古刹かな
孫追いて土筆摘みし日幾星霜
おきゅうとに再会の宿夏の旅
満月に映る地球の暗い影
寒空にカシミヤまといし夜の銀座

庄司 すみこ

(天為湘南)

水やりのホースから湧く虹の橋
草抜いて色白茗荷顔を出す
熟し柿鳥そつばむき道端に
梅花藻に泳ぎ初の目高あり
あちこちの地震をさまれ秋向ふ

四 郎

(天為湘南)

アロハにも似合ふ年頃似合ふ場所
ゴンドラの眼下は秋のグラデーション
駅伝やそうそうそうと伴走車
コンケラーベ白い煙やマリア月
秋空や大屋根リング一周す

森 童

(みくら)

残雪の富士借景に巨船泊つ
大小の仲好く籠へトマト挽ぐ
ハローキティ掴まり立ちや初紅葉
薪爆ぜて子らのまねぶや里神楽
初能や凜と発する仕手の声

鈴木 絹子

(冬すみれ)

まくなぎを抜けて石段駆け上がる
ホスピスにコーヒータイム秋涼し
古書街の溝の匂いや震災忌
穂芒や風のスキップ野の光
手から手へ渡る林檎やバスの中

鈴木 千枝子

(天為湘南)

修験者の影を吞込む霧襖
鮎落ちて山河静かに暮にけり
難解な古地図の文字や紙魚走る
海風や頬へ弾けるソーダ水
地球裂く神の御手なる大瀑布

鈴木 晴菜

(みくら)

右足のペダルを探す蝶の昼
二寸ほど跳ねて飛びたり雀の子
蠅生れ窓辺の木目なぞりたり
翡翠の波紋しづかに広ごれり
それぞれに向かふ空あり吾亦紅

鈴木 千砂

(みくら)

待春の石の天使は頬杖を
クロッカス手品のやうに咲いて消ゆ
幼名で今も呼ばれて桜餅
トンボ口の薫風跨ぎ江ノ島へ
噴水に七色の風吹き抜けり

ステパノ

(みちくさ)

少しずつ雲の崩れし酷暑かな
頼もしき最期のちから兜虫
おほちちの杖まつすぐや復活祭
マフラーのはつれや恋はままならず
数学の記号の粒だち夏の空

須藤 亮

(五五)

凍蝶の命は風に教へられ
戦争は終はらぬままにレノンの忌
青春は人に話さず寒昂
春炬燵黙りこくりてゐて二人
春服を縫はむと妻の裁ち鋏

須藤 かぐや

(五五)

穀雨なる野口英世の功績に
春雨に数羽の野鳥観察所
青葉分けケープルカーは青葉号
べた風の大東埼に夏霞
秋浅しほけの封じを祈願する

草 心

金風や早三十二年母の死後
病む友の吾は傾聴と身に入むや
早梅雨リユツクの歩く幼き子
ジャズ流れ部屋の一枝沈丁花
母の日のメール財産保存版

高瀬 俊次

(五五)

山茶萸の一花一花の小宇宙
亀鳴くや君は知らぬか種の起源
吾が春愁水割り二杯ほどのもの
両毛線の掻き分けて行く麦の秋
国境の鳥影深し青葉潮

高野 一郎

(天為湘南)

運動会探し回るやカメラの目
敬老日漢字まじりの手紙手に
秋高し店の切り盛り老夫婦
目で合図降る駅へと秋惜しむ
渋柿の梯子で吊す親子の手

高橋 みつ子

(五五)

短夜や波音せまる旅枕
御殿場線ぐんぐん迫る五月富士
友を待つ開演ロビー西日射す
新米を供へて辻の風の神
後の月書店に流るドビュッシー

高野 尚志

(五五)

鶏鳴に鶏鳴応ふ四温かな
日脚伸ぶこゑ賑やかに小鳥小屋
蝌蚪の国覗きて己が顔さらす
初桜海みてこころ定まらず
外洋に船の量感夏來たる

田中 孝衛

(五五)

春眠や思ひは遠くジャンダルム
風薫る母校に続く急な坂
赤き薔薇一本置いて君を待つ
少年の竿の動かす雲の峰
月光の雲海に浮く前穂高

「公 子」
たるたりや

手塚 智之

(藤沢翔陵高等学校)

紅の木の葉流れる水無川
夕闇にとけた螢は花のよう
浴衣着た君のひとみにうつる僕
まだ君は覚えているかなあの花火
アゲハ蝶君と見ていたこの場所

(みちくさ)

数が減り添え書き増える賀状かな
妻と行くはるか向こうの凌霄花
咲きだした三つ四つ七つ酔芙蓉
青空に赤白ピンク百日紅
梨貫うしやきしやきのあの男

次田 磯美

常盤 貴美子

(つら)

杜へと遠回りする青田かな
短夜や鐘に目覚める座禅堂
汐風の運び来る音遠花火
瀬の音も馳走となりし夏料理
秋立てり新刊本を探す書架

(冬すみれ)

白みたる空豆腐屋の寒の水
新緑の濃淡に景ふくらめる
旅装解き火色囲みぬ夏炉の夜
秋澄むや一湖に映る逆さ富士
束の間の小春の日差句碑を抱く

鳥海 陽子

中岡 裕志

(つら)

さらさらと笹の音きき夏料理
花菖蒲うれしき知らせ届きけり
短夜の夢の続きがとぎれけり
簾ごし木々の緑のそよぎかな
遠浅の海や泳げば浜遠く

秋来る朝日射し込む東部屋
空をへり笛と太鼓の村祭
遺言を残して余る秋の雲
名月やゲートボールの打球音
老年や言葉忘れる秋の雨

内藤 繁

永塚 享司

(天為湘南)

うろこ雲でこぼこ響く救急車
秋冷や身ぐるみ剥れ施術台
声やさし眼は尖りをり鶏頭花
七色の配線胸につばめ去る
午後三時見舞に来る赤とんぼ

新緑やターザンロープに子らの列
雨を待つ小さき蕾の四葩かな
珈琲や今日はホットに走り梅雨
鉢巻もきりと神輿担ぐ子ら
線香花火や玉のボトリと落ちて聞

中根 美保

(二葉)

ゆつたりと座して百寿の初笑
鷹匠の身をしながらせて鷹放つ
ひっそりと鯉の太れる花の昼
別の世の闇すぐそこに螢狩
足跡の先に子らゐて秋の浜

中村 初江

(五五)

ゆく年や夕日に光る風の海
梅白し母の忌日の陽の淡く
躑し野路に地獄の釜の蓋
方丈に碧眼の僧沙羅の花
あさがほやきのふは五つけふ六つ

中村 みき子

(五五)

春の月帰る子の角曲がるまで
バケツにも煌めき生まれ薄氷
屋形船花の下枝に触るるほど
枯れ枝と見ゆる中にも木の芽かな
切手三枚組み合はせ貼る暮春かな

成岡 明子

(五五)

風立ちてまた蘇る鯉のほり
噴水の空に触れたる一呼吸
膝寄せて線香花火の輪が出来る
畳まれてゐても涼しき白日傘
子を叱る元気が今日も草を引く

鳴坂 理智子

(天為湘南)

春雷や会議の後の缶コーヒー
熱帯夜水槽の主就眠中
古民家やオーブンメニュー走り蕎麦
十五夜のうさが招く宇宙船
絵本からトナカイ空へ聖夜かな

林 哲夫

(五五)

白木蓮のつばみの固し東北忌
新人生並び走るやゴールまで
隣より貰ひし胡瓜棘多し
匂ひ立つ梅の実届く夕べかな
蝉鳴くやプラスバンドの昼休み

野原 青

(五五)

きふ生きる力もらひぬひなたほこ
無菌室いのちありけりクリスマス
冬夕焼酎むがごとし大櫓
いのちかけしるべなきそら鳥帰る
白藤や遺影の笑顔輝ける

早田 登

しょうぶだつ剣に見立て挑まれる
薫風にまじる街角焙煎香
いけめんの甚平がさそう人力車
夏草や雑という豊かな世界
老いてなお目元涼しき羽抜鳥

原 みづき

(冬)

起き抜けの足腰固し今朝の冬
久々に針箱出せば一葉忌
冬晴や開封急ぐ子の便り
ポインセチア窓辺に朝のパンを焼く
数へ日や子供と遊ぶ役となり

原 田 稔

空覆う河津桜やのびのびと
天高し富士と阿夫利の揃い踏み
三猿に人生重ね秋思かな
漆黒の胎内巡り冬隣り
湯元かな行き交う客の息白し

平 岡 法 子

(冬すみれ)

薄一枝手折りて挿せば山の香も
クレマチス今年選びし濃紫
皐月富士どこから見ても日本一
春コート脇に抱へて孫来たる
静かな夜突如破りて猫の恋

廣 崎 龍 哉

門松や訪ひ来る人は皆笑顔
新聞を斜め読みして啄木忌
挨拶をするためにとりサンガラス
少少の風には揺れず大糸瓜
柚子の香を愛でつつ浸る冬至風呂

深 瀬 渉

(冬)

手袋を外して掴む小銭かな
鳥帰ル全員無事二帰還セヨ
おばちゃんの春マフラーも豹の柄
土産屋の葦簀越しからはやり歌
窓の外風と光と合歓の花

藤 田 真知子

(冬)

荷造りを終へし吾子の背風光る
逃げ水の果てや阿修羅の救ひの手
万緑や一樹となりて吾も立つ
梅雨きざす蔵の漆器の息遣ひ
三尺寝ボレロのリズム続きをり

福 田 善 吉

(冬すみれ)

白梅のほかに明るき夜道かな
古里へ続く鉄路や風五月
老鷺に背中押されて坂登る
風紋へ寄せ来る波や秋澄めり
何もかも忘れて一人日向ほこ

船 旅 遥

句に迷ふ風の返事に虫の声
霧の午後ギターの余韻古都へ君
野分過ぎ風に洗はれ苔の艶
色浅く小さき秋の足早に
秋高し母と選びし道の色

菩提利視

(しら)

浦波の間に間に白き山眠る
榮螺の香屋台の空にのほりけり
春北斗ネットサーフィン佳境なり
人もなくただ月照らす花吹雪
揚げる帆に風満ちてゆく青葉潮

堀口 みゆき

(鷹)

捨案山子殿られしごと草に伏す
鵠沼の家並しづかな聖樹の灯
透彫ランプ 鶯色憂国忌
樹々抜けて風鈴の音みどり色
朝涼や浜辺の歌に電車発つ

馬來 まち子

(サンシャイン)

庚申塔の判読不明蛇莓
トンボロを渉る子白のスニーカー
赤べこの首振る日ぐれ風涼し
夏衣鎌倉八幡段葛
物を捨て思ひ出拾ふ暮の秋

増井 智子

(一葉)

白梅やこぼるるやうに目白翔ぶ
春深し耳の大きなオカピの仔
枝の先まだ濡れてゐるてんと虫
防草シート破れ広がる残暑かな
水仙の香りの束を活けにけり

松坂 真理子

(しら)

盛り塩の引戸を開けて新年会
手伸ばしで干したる産着木の芽風
春愁や両手で包むティーカップ
花冷えの首に重たき喪の真珠
散りながら風に膨らむ桜かな

見上 都

(鷹)

あかねさす日を纏ひそむ皁月富士
来賓の椅子並べをり施餓鬼寺
台風の不気味な精気雲あつし
願ひ事五円にすます西日かな
技宮の水音暗み苔の花

三品 敦子

(天為湘雨)

春うらら笑ふ埴輪にうふふふふ
菜の花や故郷を出でて半世紀
旅果ての衛星飛びて星流る
解体の家眺む眼やはだれ雪
松虫やソロを楽しむコンサート

水沼 富子

(しら)

鯨鯨の吊るされてゐる通学路
帯締めて一人の刻を小正月
雪解川日本海へと雪崩れ込む
若き日を真面目に生きて昭和の日
母の日や父親役を務めし手

美濃羽 晴衣

(しら)

夕暮に母を想ひて桜餅
膝小僧はつきり見える子どもの日
小さな手団子丸めて新茶飲む
子と朝に電車見送る夏帽子
台所今宵は譲り合歡の花

宮川 敏江

(渡)

つきあひはつかず離れず浮寝鳥
焼き立てのバゲット枯葉踏む通り
白木蓮白紙に戻す胸の内
鐘霞むバレイドリアののんき顔
耐ふる目の記念写真や敗戦忌

宮 永 武彦

(サンシャイン)

八幡様の大きな空や初蛙
着膨れて駅のベンチに見ゆる海
ゆらゆらと水を踊らす金魚かな
水音の豊かと思ふ秋彼岸
夕空の色を重ねし落葉かな

村 木 勢子

(かるがも)

ママチャリの勢春一番が出遅れて
鳴き代る朝の囀補聴器に
湿気煎餅捨てて未練の走り梅雨
踏切渡る母子白シャツ光らせて
この辺が実家の跡地石落の咲く

村 松 麻由美

(湘南アカデミア)

卒業や渡り廊下に土埃
山若葉背中にはずむリユックかな
人通り無き白昼や百日紅
虫時雨空調の音止みにけり
着ぶくれて父が手を振る車窓かな

森 三保子

(しら)

橋梁に絡む青鳉魚の影
駆け込む子海開きなり相模浜
林中や蟬追ふ子らの響く声
光降る木立の蔭は蟬時雨
稲の花能登の棚田に雨打てり

森 田 順子

(一葉)

書初や日本の誇和紙と墨
診療を待つ間思はぬ花見かな
リメイクや父青春の白緋
初咲は紅蓮からや源氏池
針に糸冬日あやして通しけり

森 本 明美

落ちてなほ蕊かがやきて藪椿
ふらここに抱きて乗りし孫嫁をり
焼柴螺荒海の潮こほしけり
紅萩のしなり小さき咲き初むる
七五三つき出す口に紅をつけ

柳生恵子

(天為湘南)

能面の白さ浮き出る余寒かな
はらはらと浄土に続け花筏
靈山に神の声して瀑布落つ
秋茄子を白磁の皿に佳き日かな
ほくほくと頬張る故郷零余子飯

矢口 美都子

(xv)

一病を得て知る齡寒卵
通し土間濡れ跡残る雪女郎
風光る港を走るエキストラ
紫雲田や島に一つの信号機
京に買ふにはひ袋や花の雨

柳 草多

(xv)

碁石置く音の行方や雲の峰
伊那谷の青田の上を風走る
父の日や二日を過ぎて気づきをり
風鈴に目覚めし午後の暗き部屋
秋立つや「変身」読みて外は風

山下 巖

(渡)

「お帰り」が消えて五年目草霞む
そここに妻の気配や涅槃西風
正座して妻のアルバム繰る夜長
かなぶんぶん遺影の妻に体当たり
たはむれに妻の浴衣を着て眠る

山下 遊児

(渡)

逆立でセーフのかたち梯子乗
左よし右よし春へ発車よし
ひまわりを立たせて留守の駐在所
穂芒を滑って遊ぶ光の子
アナログで生きる安けさ雪ばんば

山田 貴世

(波・むかご会)

燻蒸の移築古民家春一日
谷戸奥の沼面確かに亀鳴けり
大寺の屋根の曲線夏日差し
葉櫻の影さわさわというは坂
若葉光鳩のたむろす寺の庭

山本 協子

(xv)

どの問ひも返事はふふ日向ほこ
少しだけ名前負けして冬の薔薇
豆まきの豆踏み潰す夜更けかな
渾身のゆるめのサーブ山笑ふ
保育士の二の腕太し風光る

吉田 半夏生

(サンシャイン)

子規の成す俳句四万六千日
背泳ぎやにんげん脱いで仕舞うまで
星祭よこの糸待つたての糸
踊の輪重なり増して退けず
焼詣の包む新聞泥戦車

わたしの
私×私×私

(藤沢翔陵高校)

梅雨明けに雲を繋ぎて神来たる
夕立の終わりを待ちて窓を見る
傘要らず夕立去りて気付きける
霧中にてあなたに夢中忘れない
霧の中少しも見えぬ銀翼よ

渡辺 正剛

土筆摘むこの丘までの大津波
惚け道いつか来るかも木瓜の花
わしわしと蟬の気迫を貰ひけり
百までも夢ではないよまんじゆしやげ
茶の花やこつそり恋もしたくなる

渡部 喬

(xib)

掘割の水ゆるやかに春流す
炉話の仕舞は風の音ばかり
大空を見あぐるやうに目高浮く
駅ホームのさよならの手話走り梅雨
昼顔の花に幸せかと聞かれ

渡部 有紀子

(天為湘雨)

猿曳の猿の始めの二歩三歩
吹かれては色を零せり春シヨール
発着のベルのしづかに梅雨に入る
齒の抜けし痕を見せあふ休暇明
冬の波打ちあひ岸を駆けのぼる

第一三二回市民俳句春の大会

令和七年四月二十五日、藤沢市民会館第一
展示集会ホールにて開催。

応募者一二十八名、当日の参加は九十八名。

講演 藤田直子氏 (「秋麗」主宰)

― 草田男から柚子へ ―

入賞作品

○特別賞 山下 遊児

揚雲雀あしたが見ゆる高さまで

○市長賞 松坂 真理子

花冷えの首に重たき喪の真珠

○市議会議長賞 原田 博之

青空へ向けて産卵しやばん玉

○教育委員会賞 川路 ゆさ

初櫻嬰の十指に十の爪

○俳句協会賞

入寮の荷は春雪に濡れて着く

鹿野島 孝二

○協会賞(以下同)

倒木は栗鼠の遊び場龍太の忌

神谷 章夫

踏青や座にほどよき石ふたつ

松井 恭子

感嘆詞湧くごとと蝌蚪の生れにけり

大平 雅芳

青墨のにじむ絵手紙春灯

水沼 富子

雑音を拾ふ補聴器鳥雲に

佐藤 享子

あたたかや子規に艶句のありしこと

河村 笑

貫乳の育つ萩焼春の雨

富山 ゆたか

校長の一拍遅き卒業歌

徳江 祐子

野原 青
ふうはりと慈光のごとし臘月
吉川 美知子
啄みの形のまにに辛夷咲く
福田 善吉
エレベーター春の光も乗せて来る
小山 晴湖
バレリーナ音なき着地春ともし
山田 貴世
囀りの一樹ふくらむ一の宮
畑 昌子
母在すこと春暁の火のほひ
沢田 敦子
白木蓮の百の蕾に雨けふる
中村 みき子
探梅や急に開けて屋敷神
村松 麻由美
ひとひらの花ひらひらとてのひらに

笠川 泉
指そつと入れチューリップ微熱あり
矢口 美都子
風光る港を走るエキストラ
常磐 貴美子
花万朶心満つ日の過ぎ易し
武 正義
農機具のタンクの埃払ふ春

第五十回一遍上人忌俳句大会

令和七年九月二十三日、時宗総本山・藤沢山
清浄光寺（遊行寺）大書院にて開催。
参加者八十名、事前応募句による参加は一四一名。
講演 名取里美氏（「あかり」主宰）
――黒田杏子の俳句巡礼――

○功労賞 西野洋司氏・河村研治氏・野木桃花氏

応募句の部 入賞作品

○遊行寺賞 加野 庸子
握る手のふとゆるみたる昼寝の子
○青木賞 中根 美保
流れ藻を連れ去る波や一遍忌
○北澤賞 尾崎 竹詩
梅干して干して小さくなった母

○市長賞

沓脱ぎに靴のずらりと良夜かな

杉林 明子

○協会長賞

水澄みてあらはに杭の舳ひ傷

高山 檀

○協会賞（以下同）

父の背と並ぶ子の背や鯨日和

山下 遊児

掛榴の失つてゆく草の色

湯浅 誠幸

一遍忌看取らるるものみな跣

彼方 ひらく

草の絮一遍像へ漂ひ来

今井 美恵子

白緋父は遺書など残さざり

鈴木 千砂

絡みつゝ蔓高みへと一遍忌

智久 薫子

衣被つるりと剝けて一遍忌

福田 善吉

霧晴れて沖に日の射す一遍忌 高橋 きよ子

雨安吾の墨の香残る書院かな 高橋 仁

秋澄むや感謝二文字の新墓石

小松原 キイ子

白靴や予想外れの雨となり

原 雅子

何にでも出来る棒切れ秋高し

岩上 明美

小さき荷も旅の足かせ一遍忌

鹿野島 孝二

とかなんとか涼しき僧の絵解きかな

増井 智子

門鉾の錆まみれなり一遍忌

坂本 美千子

秋草のやさしさ強さ一遍忌

常磐 喜美子

野の花はいつも軽やか一遍忌 浜岡 紀子

遊行忌の露ひとつぶも言葉なり 加藤 いろは

当日句の部 入賞作品

○遊行寺賞 篠原 広子

また鬼になる子にあきつ止まりけり

○青木賞 山下 徹

犬猫の卒塔婆も増えて秋彼岸

○北澤賞 松坂 真理子

秋うらら人より大きな犬の墓

○市長賞 戸恒 東人

真つさらな銭洗ひ籠秋涼し

○協会長賞 野木 桃花

水青く碧く秋思の只中に

○協会賞(以下同) 鈴木 絹子

賜高音ごわりとシート乾きけり

田口 茉於

たちまちに賑はふ鯉や秋彼岸

野田 京子

自販機は「つめたい」ばかり秋彼岸

畑 昌子

鯉の口池に秋思の輪をひろげ

伊藤 真理子

掌の賽の目豆腐涼新た

宮澤 進

鯉群れて染まる水面や秋彼岸

小林 和子

秋彼岸名馬の墓に菊の供花

山西 雅子

新しき木橋の艶や秋彼岸

神谷 章夫

秋彼岸百畳敷に膝揃へ

上春 那美

秋彼岸放生池に魚の息

岩上 明美

爽やかや竹つ影歩む影すべて

篠崎 路子

要らぬもの身より離れて秋彼岸

加藤 いろは

佳き人とよき話して秋彼岸

和田 郁子

まつさらな一日があり秋彼岸

小松原 キイ子

ゆつたりと鯉の水脈ひく秋彼岸

山本 よしえ

秋彼岸萩の枝葉を整へて

中澤 弘子

秋天や一遍様の旅姿

関 美晴

小き蜘蛛膝に寄りきて秋彼岸

第一二三回市民俳句秋の大会

令和七年十月十三日、藤沢市民会館第一展示
集会ホールにて開催。

応募者一十二名、当日の参加は九十二名。

講演 戸恒東人氏（「春月」主宰）

― 野澤節子の俳句 ―

入賞作品

○特別賞

富山 ゆたか
山の端を離れし月の迅さかな

○特別賞

佐野 健
去ぬ燕ゆつくり醸す醤油蔵

○市長賞

寺田 篤弘
小鳥来る空より音符ふるやうに

○市議会議長賞

古市 シゲ子
近道は坂道ばかり葛の花

○教育委員会賞

小宮山 はるき
虫を聴く床なる母を拭きながら

○俳句協会会長賞

野原 青
盆支度死者も生者も迎へむと

○協会賞（以下同）

山下 遊児
星月夜みらいは見えぬ望遠鏡

佐野 恋蔵
月明り小石ひとつを好きになる

渡部 有紀子
赤とんぼ肩幅ほどの沈下橋

霧野 萬地郎
江ノ電のゆるりがよろし秋の海

中村 みき子
踊り手の忘我の笠の深さかな

畑 昌子
ドロップの缶振つてみる夜長かな

原田 博之
寄木細工の合はす四隅や秋澄めり

戸恒東人
鷗飛ぶ沖の蒼さよ牧水忌

吉田 和夫
星祭よこの糸待つたての糸

原 みづき
夏潮に取り残されしドラム缶

関 美晴
「梅ジウス」壇に祖母の字秋彼岸

鈴木 智子
秋冷の一灯延命地藏尊

有井 悠木
眼差しの深き埴輪や秋澄みぬ

廣田 洋一
忌日近し欠けゆく月を仰ぎたり

小堀 公美子
潮待ちの港に月の燈影かな

小林 和子
街路樹は切株ばかりそぞろ寒

岡本 泉

指でとるジャズのリズムや霧の夜

山田 貴世

草の花何やら心富む日なり

加野 庸子

おとがひにかかる紅ひも風の盆

高野 尚志

暮れてなほ鶏頭に日のぬくみあり

開米 遊子

木道に風の声聴く水の秋

松坂 真理子

コスモスや声を聴きたき手紙来る

清水 茂代

無花果やドアノブのごと回し採る

黒田 美佐子

鬼灯を鳴らせば昭和魃り

相澤 陽子

夫の鼻やや高く見ゆサンデラス

短 歌

わが庭の柿の若葉のさみどりが命の奔^{はし}りを教えてくるる
ほっておけばまたぞろそんな時代^{とき}がくる「行^いつてきます」を「征^{せい}きます」と言い
鉄塔の上の鳶^{とんひ}のピーヒョロロ空の高みに吸われてゆけり

犬山俊昭

(花舟短歌会)

しだれ咲く川面に揺れる一時の花盛りあげて川風にちる
散りて又青葉若葉の色どりや空の高さも一際立ちぬ
ひらひらと静かに季^{とき}の落葉して道いっぱいに弾く足音

大澤清水

連日の熱帯夜に倦み見上げれば雲間にきりりと織月光る
猛暑日の続きたるまま十六夜の月も熱もち涼風を恋う
白秋の歌に出てくるセルの着物着るにふさわし十月夏日

小笹 岐美子

(湘南短歌会)

加藤 和彦
(なぎさ短歌会)

筆執るも当てはまり無し「〇〇の候」令和七年酷暑の晩夏
ピオトープ年々細る水嵩や生物多様果たせぬ人類
敬老の祝い夫婦に届きしやグループホームに居りし妻にも

唐 沢 小夜子

絵手紙を送りたき人次々と浮かびたる日は秋日和の日
ひとつ家事済む毎に吸う煙草死ぬまでやめぬ阿保ひとりかな
「いいえさ場だろ」厨のひさし金柑をついばむ鳥でにぎわいており

木 村 恵 理

雪ふるる白く染まりし我庭の桜ふくらみ三分咲き見ゆ
またねつてかわした言葉七日前逝去の知らせ永久の旅立ち
琵琶の音と香のかほり立つ極楽寺三面香の聞香いそしむ

黒 田 良 子

亡き母の日記と化したうたに触れ我に始まる短歌への道
寝付かれず夜の静寂を持て余す一首詠まんと見上ぐ星空
「大丈夫」のひと言戻らぬ十年目生きてみますか戸惑いながら

鮫 島 美和子
(なぎさ短歌会)

立春の運んでくれた幸せは黄色い蝶々ほどの明るさ
白樺の芽吹き初めたる蓼科の静かな朝に鳥と目覚めぬ
赤茶けた英和辞典の裏表紙に他人行儀に旧姓の吾

沢 田 昌 子
(心の花湘南歌会)

浄智寺はシャガと躑躅の花ざかりすり減りし石段躓き登る
亡き人の声想ひをり結界の杉生の上の高き青空
裏山の細き階段登り行く澁澤龍彦の墓はいづこか

塩崎麗子
(湘南藤沢短歌会)

青空に雲の一片溶けてゆく古都の山にも確かなる春
毎日を食べて笑つて生き生きと九十半ばの叔母愛らしき
折々に集めし和紙の一枚を透かせば見ゆる夕景の美し

鈴木通子
(心の花湘南歌会)

水やれば初めて我に微笑みし友の花壇の千日紅の
半月の今宵たわたわ揺れているおほろに泛かぶ花白き萩
一花のみ近づきて来る他は失せて濃き紫のヘリオトロープ

高橋美津子

ホルター心電図付けデイケア看護師項目を計時してくるヒマワリ揺れて
米寿近きに弟子にしてとう五十歳活気満ちおり遠き日顕ちくる
月毎に道具いれかえる茶道男孫手伝いくるる授業にあるからと

高畠とよ子
(心の花湘南歌会)

振り向けばまだ砂浜に立ち尽くすひとりの姿夕日富士山
「おはよう」とわれには聞こゆ快い目覚めに朝鳥通う日々
チャッチャツ声を真似ればシーンとなる雑木林のホーホケキョー

竹中亮子

的確な助言とみごとな筆さばき師田先生に出会へたわが書
店内の美しき料紙の匂ひたつ古今和歌二首散らしてみたし
給湯器の故障にしどろもどろして今日の予定はどつと崩れる

田中依子
(なぎさ短歌会)

吹き溜まるわくら葉の下頭をもたぐ露の新芽に朝の陽清し
窓越しのもみじ葉いつしら色染めて夫看る日々の過ぎゆくを想ふ
二人なら飛び越えられた水たまり今は一人でゆつくり渡る

田村孝子

小指ほど小さき西瓜庭先に黒き縞見え心浮き立つ
姫烏頭や小さき花揺れ春を告ぐ人目に触れず密やかに咲く
ダンボール抱えて友は風のごと土産のりんご数多置き去る

戸村忠子

(声楽調和道歌の広場)

それぞれに浴衣三味七重八重花火華やぐ江の島の宵
明けの星輝くダイヤ煌めいて今日一日を照らし初めしか
高々とひまわりの花猛暑にも燃ゆる金色元氣印に

豚汁

(藤沢翔陵高校)

仕事帰り夜明けを待つて恨み辛み曙までには傷癒す
近づけば近づくほどに同心円一回だけでも抱きしめたい
二人ばっちいつも通りの一人よがりプラネタリウムで別れましょう

中川節子

小半年雪の中なる故郷は「道踏み」と言う方言残す
雪の夜は祖母に抱かれて夜着の中「弥三郎婆さ」の語りねだりし
節分を過ぎても雪は日々積る越後魚沼石打の里

橋田美恵子

(心の花湘南歌会)

難関の試験合格娘から告げられ嬉し正月祝う
気持ちよく肌だし眠る乳飲み子へタオルお腹にわれはまもりて
忘れぬ生きてしおれば今年は百歳母七十一歳でみまかりにけり

松浦みどり

(湘南藤沢短歌会)

嵩たかき紙の新聞ひろぐれば読みつくせぬまま冬日は暮れぬ
芝草に紛れてはびこる雑草よ吾もさなりと可笑しみて引く
手作りのピールに新茶雨の午後読みかけの本再び開く

三浦節子

(花舟短歌会)

過またず秋分に咲いた彼岸花燃えたつように川辺に群れて
早朝のラジオ体操に初参加ケヤキの下の枯れ葉踏みつゝ
菜の花と濃い濃いピンクの桜花河津の春に今年も会える

森睦子

わが庭に夕日浴びつつ水まけば空へと続く虹のかけ橋
猛暑にも日増しに赤くミニトマトそよ風に揺れ夏を彩る
コスモスの花咲き始めひとりじめ庭に佇み秋を満喫

山本澄子

(九月会)

箱根路の旧街道に旅人の踏みけむ跡に病葉積もる
七曲りしつつ登れる街道の石だたみの間の苔は色濃く
茅ぶきの屋根の中にて夏ながら温きがよろし茶屋の甘酒

ユーカリユーカラ

(花舟短歌会)

大国が台湾沖で威嚇した 嘘じゃないのだ四月一日
しじま裂きソロに二重唱カノンまで軒が響く夜の病室
辛いことありし日なりてもらいたる鯛のはらわた手間かけて抜く

川

柳

愛 子

(鶴沼川柳同好会)

科学誌で満たすミクロの好奇心
周りの目あつて万札届け出る
喜ぶは夫ばかりの盆帰省
閃きを究め極めてノーベル賞
園児らが明日またねのおやくそく

赤堀 晶子

(六会川柳会)

亜熱帯化現実味帯び迫り来る
待合所内緒話に向かぬ耳
ファミレスはタッチパネルに給仕ロボ
防災の意識トラフが目覚めさす
夜が明けるいい事だつてきつとある

雨宮 則子

(湘南台川柳会)

米値上げ他も値上げで音を上げる
軍拡に軍需産業はくそ笑む
新調のメガネくつきり見える数
見えていない一字一句はそこにある
はんやりとドロップ形の月涙

いさを

(辻堂川柳会)

がまんとは入れ墨のこと辞書で知る
良い外科医出会えて手術今がある
五月蠅いと小さき命捕まえる
トランプに振り回されて渡米する
年に一度行かう仕事硝子拭き

石川 正明

(湘南台川柳会)

ノッてきた延長誘う五分前
お局をスパッと切った管理職
連れてつてくれた記憶の握る寿司
帰省中ごろごろスマホ居間にいる
手の先にスマホ装着令和の絵

石 綿 由美子

(湘南台川柳会)

モンシロ蝶広い世界へ手をふる子
まだ早い終活よりもチャレンジだ
朝のクモ何か良いことある予感
新しい世界を求めまず一步
見おろせば富士の頂き手を合わす

市川 嘉 紀

(鶴沼川柳同好会)

嫌な奴セールスコンビ組まされる
気乗りせずわざと遅れる見合い席
店替り蕎麦喫茶ビザ空き店舗
歯の治療鏡の中の皺の数
どこへ行く秋風に乗る種子の旅

井 上 朗

(六会川柳会)

ノート読み思い出してはバカ笑い
飲みすぎたプレーキ利かせグラス置く
野良猫が鳴いて近づき誘い来た
散歩道ウグイス鳴きて呼び止める
指切りで幸い願う約束よ

井 上 朗

(川柳こぶしの会)

足腰に合わせて畝を休ませる
春風にミヤクミヤクだつて飛び跳ねる
癌検をパスしたあとの五月晴
トランプへ怒り泡立つ大ジョッキ
生きるとは耐えることだな夏の草

岡 本 昌 代

(湘南台川柳会)

粘着力うすれはがれていく夫婦
アバターのお酒くみ交わす
故郷へ遺骨還れと海なる
アメリカを江の島の灯台で観る
入学祝い栄一さんの大移動

小 野 敬 子

(六会川柳会)

誘ってはないのについてくる夫
皿の色気にせず食べる年金日
顔わかるノドまでくるが出ぬ名前
ゴミ箱で薬のんだか思い出す
ランチにもシニア割効く店さがす

加 藤 弘 子

(湘南台川柳会)

キズを抱き風の向くまま風見鶏
それあれで分かる夫婦で齢をとり
母さんの匂いで焼けるタマゴ焼き
探しものしている夕陽が早い秋
いちにちを笑って過ごす修業中

川島啓史

(六会川柳会)

湘南に江の島ありて道しるべ
六会は学都の替れ夢あふれ
喜寿間近返納せよとおられる
猛暑耐え藤棚のつる雨こがれ
我が街に清水の谷戸田ホタル舞い

今日一

(川柳こぶしの会)

夏服も少し残して衣替え
木が入り猛暑の舞台秋となる
道草も食って人生深くなり
買い物は百均覗き次の店
馴染み店何時ものやつで出る料理

日下部 いくお

(湘南台川柳会)

握った手昔ときめき今拒絶
垣間見る人生縮図投書欄
なつメロで昭和に浸る八十の会
アレソレで領き合える老夫婦
理不尽の戦禍長蛇の避難民

熊田 松雄

(湘南台川柳会)

産声がいのちの旅のファンファーレ
うっかりがふえてく老いを抱きしめる
早起きに手持ち無沙汰の休刊日
ジョーカーが隠し持つてる世界地図
老いるほど見た目大事と妻チェック

胡 頹子

(湘南台川柳会)

号外に群がる人にハトのフン
胃カメラが鼻から入りコンニチワ
チーママの目配りサビ落とす
子沢山長女ママより手際よい
ヘルパーに洗い晒しの心見せ

笹原 英美子

(湘南台川柳会)

散歩だよベット誘うも顔そむけ
みな仕事平日ランチシニア族
顔見知り名前浮かばずねえあなた
温暖化節目つかない春夏日
店頭に並んだスイカ季節呼ぶ

ケ イ

島津 富弥

(湘南台川柳会)

憧れの推しに散財惜しまない
カメラ据えレアな鳥との出会い待つ
空気読め自信なざげに一歩ひく
休み明けやる気スイッチ入れなくちゃ
次々にわんこがつなぐ人の縁

直線も時にカーブという安堵
主流派に乗れない雑魚のいる激み
献金の業火広がる永田町
階段の手摺気骨が握らせぬ
特養の窓開かせる遠花火

尚 風

(川柳おしの会)

もったいない唱え続けてゴミ屋敷
星条旗まとい暴れるトランプ氏
葬りたい戦の怨嗟箱に詰め
物価高隙間バイトで生活費
ブカブカと大海原をブラの島

菅 沼 雅 彦

秋誘う一雨^{ひと}づつの衣替え
今年もか春なし夏がやってくる
増えるのは薬の数とため息か
カラオケで選ぶ曲で年わかる
富士の山忍者をこえて七変化

近 下

(辻堂川柳会)

のら猫が仲間とみたか逃げもせず
一言で碎けてしまう我が心
陽を浴^あたつくし同士の背比べ
ハイテクに会社追われて主夫となる
レントゲン心のかげり映し出す

月 村 克 子

(鶴沼川柳同好会)

中年の犬と老婆が瘦ぐ夏
三十回囁んで米喰うありがたさ
旅心彼を虜^もにしてみよう
息子ほめ父親似かと母に聞く
痛すぎる辺野古埋め立て海が泣く

竹 花 敏 夫

(湘南台川柳会)

ニワトリも食べてるらしい古古古米
チャレンジも無限に続くAI化
擦り切れたカバン会社を勤め上げ
トランプに友好国もいじめられ
川柳で心も豊か老上手

多 美 子

(六会川柳会)

乗り気では無いが断る勇気無く
このにおい勝てるもの無しラーメン屋
幾つまで生きるつもりだ薬漬け
四季でなく二季になる日がやって来る
ひとり身で身軽なはずがひざこわす

戸 澤 千 鶴

(湘南台川柳会)

吾子抱え銃後の母は戦禍耐え
握り箸を論ず老爺の食べこぼし
全権を妻に握られ濡れ落ち葉
絶賛をするが読めない揮毫文字
注射打ち腰に喝入れ行く花見

豊 田 真 一

伊勢参り大神宮は言いわけね
言わないで福島行くの競馬しに
先ず停戦次に和平の話し合い
貴船川床^ど豪雨よ無理よあきらめて
妻のメモ重い買い物コスモスへ

長嶋 富士子

(湘南台川柳会)

産まれた子抱えたママは天使さま
カラオケのマイク放さぬ好好爺
過去を見ず前を見据えて今生きる
映画館出て来た人はみな涙
秋風と木枯らし四つに相撲取り

長屋 比佐子

(湘南台川柳会)

関東のすき焼きたまげた白いネギ
人事決め鍵を握るは我自身
背中押す母の言霊温かい
団結で積み木崩れぬ家族愛
夢を追う時の余白を持て余し

幡多 純

(湘南台川柳会)

おおまかでついフードロスひとり者
オーバーにヒジャブで避ける紫外線
路線バス間引き空白過疎地なみ
友の愚痴相槌を打つ首が凝る
アンティーク値切る掛け合い粘り勝ち

深野 いく生

通信簿より怖い健診結果表
起き抜けの鏡に老いの大写真
夫婦喧嘩夢では蹴って俺の勝ち
知りたくはないが知りたい我が余命
願わくは楽にコロリとゆくあの世

西村 雅子

(六会川柳会)

草むしり小さな椅子が役に立ち
この猛暑止めるブレーキ欲しいなあ
何回も終活ノート書き直す
広報は手書手刷でざらざら紙
何事も本音で向う友が好き

はじめ

(鶴沼川柳同好会)

反核の種まきをして平和賞
トランプの目には見えないホセムヒカ
宝くじ数字一つで逃げた億
検査値がまたも好物取り上げる
イヤイヤをしおしおまでにして嫉

古木 光江

(鶴沼川柳同好会)

指切りの思い出全部ゴミに出す
バレバレで種も見え見え孫手品
色付いた柿の実鳥が試し食い
スマホから育児の指南受けるママ
妻キレるとはけた顔で聞く小言

マリ

(六会川柳会)

富士山がきれいに見える日は元氣
マスクなし笑顔の人は誰だっけ
失業と言わずフリーかつこっけ
若いねと言われ戸惑う卒寿過ぎ
手おくれと思いながらもサブリ飲む

水城 茂子

(六会川柳会)

何もかも値上げゆとりをうばわれる
年金で何とか暮らすつましく
八十路坂まだへいちゃらだ気で越える
衣食住足り健康であればいい
かばい合い労りあつて共白髪

村田 和彦

(湘南台川柳会)

殺伐も心潤すありがとう
甘言で囁いてくる還付金
目覚しを毎朝起こす高齢者
親父とは娘の下着別の竿
秘書募集口の堅さがまず基本

守田 貴美子

(六会川柳会)

寄り道はしても結局帰る家
しみついた浮世の垢ってどんな色
一本の指の大事さわかる怪我
離さずによかったこの手五十年
惣菜を買ってひと手間付け加え

柳澤 いそ江

(鶴沼川柳同好会)

虎の子を隠した先に掃除の手
ちと訛る教師に習う標準語
独裁の乗り気が見せる地獄絵図
鉛筆でつつかれ背骨だけ目覚め
弔辞披露生きている時それを言え

矢野 正

(湘南台川柳会)

カタカナ語老いのアタマが痒くなる
お大事にその一言に励まされ
病院へ付き添う妻も杖をつき
納豆の粒も減つて物価高
願いごと持って子どもは伸びていく

山田 案山子

(湘南台川柳会)

昼食後妻とホットのレモンティー
断捨離は惜しい惜しいの砂時計
窓越しに大きな手話でありがとう
ママチャリのかごでざわめく物価高
年の瀬の人手不足にニヤーと鳴く

八幡 禮子

(川柳こぶしの会)

おはようの声がとびかう通学路
輪の中に溶けた笑顔の噂好き
見ぬ振日も聞こえぬ振日も生きる知恵
好きな事何部やつても飽きは来ず
生きるとは厄介風がわらつて

有

(辻堂川柳会)

副作用薬で抑え矛と盾
相合の傘も今では杖代わり
ときめきを不整脈だとナース言う
野毛小路唯我独尊千鳥足
差向い小さく祝う遍路宿

悠々

玲和

(辻堂川柳会)

セットメニュー完食するが腹痛め
総裁選反省なきは進歩なし
次の店へ回転ドアでつんのめり
おしゃべりで弾けでお名前はと聞けないよ
腹回りライン気になり呼吸止め

吉野健司

(湘南台川柳会)

ハクモクレン手品のようにボツと咲き
健康法いろいろやって身が持たぬ
ダイエット邪魔するように五割引
三億円当たってしまうのもリスク
うるさいと言えずおにぎやかなことで

第三十八回 ふじさわ川柳大会記録

日時 二〇二五年 九月十四日(日)
主催 ふじさわ川柳大会実行委員会
共催 (公財)藤沢市みらい創造財団
後援 藤沢市・藤沢市教育委員会
会場 藤沢市民会館 第一展示集会ホール
参加者数 六十九名

宿題 「指切り」 永井 天晴 選

五客

指切りと裏切りとても仲がいい かつ子
指切りの証し全うする介護 鹿声
指切りで愛を誓った二枚舌 富弥
指切りの最後になったフルムーン 純
別れぎわの指切り指にまだ微熱 よしき

三才

人

したくても指切りできぬドラえもん 艶競

地

指切りを覚えていたの私だけ 貴美子

天(市長賞)

指切りのグレーな嘘に月冴える 小鈴

軸

死ぬまで一緒約束守れない小指

宿題 「目まぐるしい」 田中 岳 選

五 客

踊らされ振り回されてまた選挙
また違う彼女を連れて見せに来た
情報洪水見当たらぬ浮き輪
米野菜日替わりになる物価高
人が減り町内会の役がまた

三 才

人

ハチ公も目をバチクリの渋谷駅

地

太陽の塔も驚く半世紀

天 (市長賞)

妻の留守まだ終わらない箇条書き

軸

買った途端に旧型になるスマホ

宿題 「ミクロ」 相原 あやめ 選

五 客

平和への誓いミクロのころざし
針の穴から機密がするり通りぬけ
繊細なビールの泡にくすぐられ
懸命に生きてボツンと大都会
ちっぽけなプライド謳歌自国主義

三 才

人

遺伝子のルーツたどれば同じ母

地

真夏日に小さい秋を探してる

天 (市長賞)

群衆に紛れ扇動するスパイ

軸

ズームイン毛穴に滲む嫉妬心

宿題 「しゅしゅ」 犬塚 博 選

五 客

しゅしゅ同意男の嫁がやってくる
ペアルック妻の笑顔に抗えず
ノンアルで酔った気分の休肝日
喜んでお供したのかきびだんご
こんなにも呑んでないよと払う金

三 才

人

喜ぶは夫ばかりの盆帰省

地

聞かないでおけばよかった熨斗袋

天 (市長賞)

母の目に射られ挙手する参観日

軸

わが家では妻のひと言指示となる

特別課題 「ひらめく」 熊田 松雄 謝 選

五 客

暇だから馬鹿な考えだけ浮かぶ
ピカドンが変えた日本の生きる道
ひらめきと遊び心に句は踊る
閃光が走り瓦礫と子供の死
ひらめいて足どり軽く出る句会

三 才

人

アイデアは酔いが回ると湧いてくる

地

生き様を袈裟斬りにする稲光

天

もう駄目と思ったときに出一手

軸

ひらめきの金の卵を産む湯船

五行歌

秋山昭子

(藤沢日曜歌会)

ふうふう
はあはあ
あまりの暑さに
息をついているのが
やっど です

浅野征子

(藤沢火曜歌会)

今宵中秋の名月
きれいなまん丸お月様
吹き抜ける
やわらかな涼風^{すずかぜ}に
猛暑忘れ一瞬感じた秋

阿部弘子

秋の便り
とっておきの一枚を
絵てがみで
ドキドキ
いきます あっ

新井奈々草

(藤沢火曜歌会)

実った稲穂が
皆揃って
おじぎをしている
会釈して通る
夕暮れの畔道

飯田 敏一

(藤沢火曜歌会)

杉原千畝記念館を訪ねる
彼の独自の判断で
6、000人のユダヤ人が救われる
帰国寸前まで
ビザのサインを書き続けていたとか

石川 トシ

(藤沢日曜歌会)

バス停の時刻表に
すーっと
トンボ
飛んだ方が早いと
去っていく

石松 いさを

(藤沢日曜歌会)

ラジオ深夜便を
聞きながら
今夜も眠りにつく
いつものアナウンサーの
声が心地よい

いわき やすお

(藤沢火曜歌会)

戦後に生まれたばかり達
儉約を強いられた
時期もあったけど
平和に過ごせたことに
いま感謝する

牛島 芳一

(藤沢火曜歌会)

情緒が失われていく今
「あめあめふれふれ かあさんが…」
童謡が心に染み入る
私…
昭和の人

遠藤 由里

(藤沢日曜歌会)

イケメンと詠われた
鎌倉の大仏様
お歳を召したのか
横から見ると
少し猫背におわします

H ぜん や

(藤沢日曜歌会)

気温38度の昨日
今日は30度あー涼しい
あれ?どこかおかしくないか
20年前は30度で驚いていたのに
人の鈍感さと順応に驚く

緒方 真子

(藤沢日曜歌会)

金魚が一匹やって来た
赤い小さな命が
水槽でゆらゆら揺れる
長生きしようね
私もゆらゆら生きるから

岡本 まさ子

(藤沢日曜歌会)

モウソウは
殻を破って
ずんずん のびて
やがて
くえない奴になる

小原 美子

(藤沢日曜歌会)

父にあい
母にあい
妹にあう
歌の中で
そして思う

菊地 敬子

(藤沢火曜歌会)

外は大雪
音もなく降っている
ストーブのやかんの音だけ
黙って何事もなく二人は
冬に囲まれている

喜島 成幸

(藤沢火曜歌会)

炎天の
屋根に座って
漆喰を
塗る男らに
敬意を表す

黒木 允

(藤沢日曜歌会)

「92年生きて来れたのは」と
教え子達が聞くので
「この恋人のお陰」と
全員吹き出した
恋人の20代の写真に

清水 大智

(藤沢翔陵高校)

人から嫌われると
人間関係から
解放される
だからみんな
俺を嫌え

志 津

(藤沢日曜歌会)

豆腐の腐の字
気に入らない
料理法は色々
栄養豊富にて
豆腐は豆腐よ

鈴木 春野

(藤沢火曜歌会)

いつも居るのに
稀に迷子で困らせる
チビで丸くなった
消しゴムにも
居場所あり

高原伸夫

(藤沢日曜歌会)

人生の
時計の針は
止められない
容赦なく進み
何をなしたか問い掛ける

田中きみ

(藤沢火曜歌会)

あえないとき
それぞれが
あいたい人を
おもいながら
同じ時を生きている

高原美智子

(藤沢日曜歌会)

うれしいことも
悲しいことも
憤りも
いつばいあつて
まだまだ私は生きている

寺田篤弘

(藤沢日曜歌会)

そよ風に
風鈴鳴るように
小さな小さな幸せに
こころの風鈴
鳴りており

橋本圭子

(藤沢日曜歌会)

失せ物探しと
失敗の後始末で
大忙し
そこつ者の
長嘆息

細谷修一

(藤沢火曜歌会)

私の
三楽
食
本
旅

ひろこ

(藤沢日曜歌会)

幼き日
見上げて天蓋^{てんがい}
膝の上ではお赤飯。
掃き捨てられない
こぼれ萩

松岡雅子

(藤沢日曜歌会)

赤とんぼ
一段ずつ
確かめるように
季節を
下りて飛ぶ

松本希雲

(藤沢日曜歌会)

イメージを
絵と文字に
直ぐ結びつける
5歳の女の児
素直さが眩しい

茂木知恵子

(藤沢日曜歌会)

うるつと涙を抑えた
友よ 久しぶり
楽しい再会のひとときの
残り時間は過ぎる
もつと話していたいよ

夢 十

今はもうないおじいちゃんの家。
夏休みのたび、ずーつと行つてた。
帰る日はいつも泣いていた。帰り道でも泣いていた。
おじいちゃんが来た時、嬉しかった、でも帰る時は泣いていた。
泣き虫、泣き虫、きつとずつと。

山口博子

(藤沢火曜歌会)

身の丈も縮んできたが
それに合う暮らし
そこそこ楽しむも
今は気力体力温存して
この暑さを乗り切るのみ

横山礼子

(藤沢日曜歌会)

刺さった
茄子のトゲに
指のさきが
何か言っている
じくじくしくしく

現代詩

カンナ

横須賀線の線路沿いには
赤いカンナが
どこまでも続いている

列車の轟音を物ともせず
毎年約束を果たすように
赤いカンナが
咲いている

男がいった
あなたはカンナのようにだ
わけを聞く間もなく
男は去った

花びらの燃える匂いを振り払い
赤いカンナは
傲然と咲き続ける

相澤陽子

ふゆのひ

おぐり あつこ

ざくざく おとのする ゆきは
きらきら ひかりをはなち とけてゆく

てのひら サイズの ゆきだるま
いえの なかは あたたかく

すこしずつ
すいてきとなって
ちいさくなってしまう

みどりいろのでぶくろ
ぬれちゃったの
ゆきだるまの命が瞬く

かわかしてしまふと
ちよっぴりせつない
ゆきだるまの命が輝く

すいとうとぼく

おぐり はるき

あったかいものをいれると
ずーっとあったかい
つめたいものをいれると
ずーっとつめたい

すいとうはたえている
なかがなくなっても
ずーっとたえている

からっぽになるとママがあらってくれる

こんどは

おちやをいれようかな

こぼさないようにそそいでく
あふれないようにそそいでく

キツクふたをしめて
とじこめる ぼく

ロマンティックでなくていい

佐藤 裕一

ロマンティックでなくていい
公園の片隅で 互いに肩を抱きながら
甘い言葉を囁き合う

そんな時間はなくていい
朝目が覚めて カーテンを開けるととき
日の光を浴びて 眩しそうにしている
君と出会えれば それでいい

ロマンティックでなくていい
映画館で 手を握り合いながら
恋愛映画を見て 涙ぐむ

そんな時間はなくていい
夕飯のテーブルを囲んで
今日はこんなことがあったんだよと笑い合う
そんな時間が持てれば それでいい

ロマンティックでなくていい
ロマンティックでなくていい

誰も知らない

篠原 貴子

幻想世界

チズコ・W・クジラ

貴方はこの大宇宙のどこから来たの。

誰も知らない。めぐり逢いそして愛を育て生き
て笑って四十四年。そして突然どこへ行つてし
まったの。あの日この世から去ることを知って
いたらもっと愛を温めて過したものを。

その時がこんなに早く来るなんて。貴方は知って
いたのですか。誠実さと心の広さで私をいつも
支えてくれた貴方。そして希望への道を語りな
がら歩むことが出来た日日。

感謝をこめてありがとうございます。

もう、何度目の秋が通り過ぎたことだろう。

これから残った日々。

今日が一番若いこの日

私はいろいろな事に挑戦し学びながら
希望の虹と一緒に生きてゆきます。

この世にたしかに生きたという
足あとをのこして

ここから去る日

それは誰も知らない

早朝窓を 開けると

水墨画と 見まごう景色が広がって—
フワフワした 水の粒子は横に伸びて
全ての個体を 包み込み畑の梅の木々
戸々の家 寺の銅葺きの屋根
高い松の木までも 餌食に—

ひとときわカン高く警笛を鳴らし
近づく電車は 音だけが 残り
彼方に 吸い込まれ——

気温も上がると 浄化された景色 が
何事もなかった 様に姿を現し——て
ざわざわと踏切りを通る は 学生か
遮断機をくぐり抜け 足早に渡り去る
一瞬の幻想世界は 私 いや人々への
束の間の癒し空間

だった——のか!?

プリズムと偏光板

中出 隆 義

プリズムに光を通せば七色に
一年を通せば四季に
人生を通せば喜怒哀楽に
そしてまたプリズムを通す
七色が光に 四季が一年に
喜怒哀楽が人生に
何個プリズムを並べても同じ繰返し
そこで偏光板を用意する
光は赤だけに 一年は春だけに
人生は楽だけになる偏光板
でも何だかものたりない
そんな偏光板を望まない
色に溢れ 四季があり
喜怒哀楽がある人生が良い
ただひとつ
世界を通せば平和だけを通す
大きな大きな偏光板があれば

正義の解体

早坂 尚輝

正義とは 青信号の向こうで踊る象のことだ
いや違う 冷蔵庫に入った昨日のカレーだ
裁判官の木槌がバナナを叩いている
有罪無罪有罪無罪 ルーレットが回っている
テレビの中の正義は歯磨き粉のCMに挟まれ
て三〇秒で世界を救ってまた歯磨き粉に戻る
正義正義正義正義 言葉を百回言う
ただの音になって意味が蒸発する
善人の仮面をかぶった悪人が
悪人の仮面をかぶった善人を 裁いている
時計の針が逆回転 昨日の正義が今日の悪
正義は風船 膨らませすぎると破裂する
B A N G ! 何も残らない
白黒つけたがる人たちが グレーの世界で
迷子になっている 地図を逆さまに持つて
正義なんてどこにもない あるのは人の数だ
けの正義 七八〇〇〇〇〇〇〇〇個の正義が
空中でぶつかり合っている
またあした 新しい正義が生まれる

夜明け前

ひまわり

夜明け前の空を見上げて
空の暗さに驚く

冴えた空

みほさ

夜でもなく朝でもない
そのひとときが
深く 重い闇に包まれているのを知る

遠く眩しい空の奥
澄んだ世界に吸い込まれる
顔を上げると心が浄化される
サイダー水のように
パチパチ弾ける冴えた空

気がつけば
空が白み
朝が訪れる

海がある街
天気によって変化する風の匂い
波の音に救われる
どこまでも続く水平線
海と空の万華鏡

夜明け前が
朝を運んできてくれる

目を瞑って深呼吸
毎日にどんな彩りを添えようか
どうせ生きるなら綺麗に色付けしたいんだ
冴えた空に包まれて
私は今日も必死にもがいて生きている

「流し」

村上 きょうこ

午前六時 床を出て
台所の「流し」の前に立つ
手洗い うがい 歯磨き
流れる水音はやさしい

ふと想い出す

山裾の生家の裏庭
掘り抜き井戸の横の「流し」
母が人参や大根を洗い
幼い私は横で見ている

朝昼晩の食事作り

あれこれ日に何度も

生きるために「流し」を使う

一日の終わり きれいに洗う

種をまく

山田 にしこ

花を愛でる
うす紅色のつぼみが
はにかむように開いたとき

茎をつたい

小花の蜜を集めるアリたち
やわらかい葉に穴をあけるカマキリたち
アマガエルまで
群生する藍にやってくる

こんな小さな生き物たちの
生業を

生きて在るかぎり
見続けたいと

私は種をまく

随 筆

父のこと

甘粕保子

実家は風呂屋を営んでいた。父は背は低いが筋骨逞しい人だった。上半身は裸で、真つ赤に燃える釜の中におがくずや薪を大きなシャベルに取って放り投げていた。

養女に出ていて、親戚のおじさんと思っていた小さい頃の私には近寄ることも怖いような人だった。家の入口がその父の働く釜の横だったので、私は挨拶もせず、逃げるように家の中に入っていったものだった。

小学生の頃、夏休みにひとりで泊りに行った。従妹と思っていた妹たちと次第に打ち解けて遊んでいたが、休み時間で父が家の中に入って来ると、私はなるべく父の近くに寄らないようにおとなしくしていた。

夜になって、その父が家の入口の外から子供たちを呼んだ。わーっと飛び出す妹たちの後ろからこわ

ごわ覗くと、働く父ではない笑顔で、手に沢山の花火の袋を持っておいでおいでをしているのだった。しゃがんで私を膝に乗せて、線香花火をしてくれた。

双子だった長女、次女の片方を、母の産後の大変さを思い、伯母が引き取って結局ずっと育てていたのだ。

私が訪ねていくと父は本当に嬉しそうにかまってくれたのだった。が、何も知らない私は、いつも下を向いて恥ずかしがっていた。

亡くなった父の齢も超えてしまった今になって、あの頃の父がめっちゃくちゃ懐かしい。

猿田彦命とぎっくり腰

市川光治

(文芸光風)

猿田彦命は天孫降臨の際、ニギノミコトを葦原中国に案内した国津神である。その後、故郷である

伊勢の国五十鈴川の川上に帰った。

伊勢市宇治山田の猿田彦神社と鈴鹿市の椿大神社が猿田彦を祭る神社である。

風貌は天狗にそっくりである。天狗のもとになったのは、猿田彦命かもしれない。

猿田彦を祭る神社は全国各地にある。関東では、千葉県成田市には猿田彦大神、銚子市には猿田神社がある。埼玉県では秩父市の榛神社、日高市の高麗神社、野々宮神社がある。

白鬚神社の祭神も猿田彦である。

また、天孫降臨の際に道案内したことから、道の神、旅人の神とされ、道祖神と同一視される。

藤沢市の慶應大学湘南キャンパスの看護学校の近くに猿田彦神社があるが、これは道祖神であり、猿田彦の名を刻んだ石塔があるだけである。アヤマで有名な笹久保公園の近くである。

ある日曜日、私はこの石塔を見るために出かけた。笹久保公園の手前に十二台ぐらいが止まれる駐車場がある。ここは満車であったので、看護学校の駐車所に車を止めた。車から降りようとしたとき、突然腰に激痛を感じ、おろした足の膝ががっくりと

曲がった。それから歩くこともできなくなった。ぎっくり腰になったのである。私はそのまま車に乗り直し、家に戻った。道の神に会いに行くつもりが道を歩けなくなったのである。何かの祟りであろうか。

二年前にもぎっくり腰になったことがある。朝の出勤時に会社の駐車場に車を入れ、玄関まで歩いていく途中で膝ががっくりしたのである。そのときは壁につかまりながら、何とか社内に入り、出会った同僚に、急にぎっくり腰になったので家に戻るといったのだった。家に帰ってから私はある総合病院に行った。三時間ほど待たされたあと、診察を受け、CT検査とMRI検査を受けた。が腰には何の異常も発見されなかった。私は医者の方箋をもらい、近くの薬局で湿布薬と沈痛薬をたつぷりともらった。

湿布と鎮痛剤の効果で三日ほどでぎっくり腰はほぼ治ったのであった。

今回は自分でドラッグストアに行き、湿布薬と鎮痛薬を買った。水曜日にはほぼ痛みが引いた。

戦後八十年

一 柳 愛 子

八月十五日戦後八十年を迎えた。終戦の時、私は九才だった。東京港区の小学校に通学していたが、戦争が激しくなると小学生だけの集団疎開が始まり、栃木県的那須塩原に行く事になった。姉と私（小学校二年生）も皆よりちよつと遅れて疎開した。疎開先は「あさひ亭」と云う旅館だった。旅館の裏は川があり、橋を渡ると露天風呂があった。友達とよく露天風呂に入った事を思い出す。戦中、戦後、日本は貧しかった。

父が時々面会に来てくれた事を憶えている、姉は一緒だったが、三才上だったので、中学に入学するので、戦争が終わる前に家に戻った。

三月十日の東京大空襲、アメリカ陸軍航空軍によって実施された。父は勤めで家に戻っていないだったので、母は弟を背負い、姉の手を取って今の東京タワーの辺り、芝公園や浜離宮に逃げ廻った様だ。

くわしくは母も姉も空襲の時の話は私にしなかった。港区三田の家は焼かれ、知り合いの埼玉の家に一時移ったので、私も終戦になって塩原から埼玉に行った。

しばらくすると高輪の泉岳寺（赤穂義士のお墓）

から当時の都電で一つ目の伊皿子にある父の会社の社宅に移った。家の近くに高松の宮様の御用邸があった。元の小学校はちよつと遠かったけど歩いて通った。すごく懐かしかった。担任の小坂先生が授業の後、私に職員室に来る様に云われて行くと、先生は「君が戻って来るのを待っていたよ」とあたたかい言葉を云って下さった。

小学校高学年になると、家は渋谷に移った。井の頭線で渋谷から一つ目、神泉駅から三分位の所にあった。帰りは道玄坂を登って帰る事が多かった。

渋谷は結婚する迄十年位住んでいたもので、凄く懐かしい所だ。今は若者の街になって、時々ニュースに街が出て来ると、よくあの辺りを歩いたなあーと思いが呼び戻される。

当時、渋谷駅の周りに東横百貨店、東横のれん街があつてよく買物をした。又、駅の前に「忠犬八チ

公」の像、飼い主の帰りを待って、飼い主が急死後
も駅前で、十年間位待ち続けたと有名だ。今の忠犬
ハチ公像は二代目だ。一代目は八十年前の空襲で無
くなっていて。

敗戦八十年、世の中はどんどん変わっている。唯、
今も世界で戦争が続いている。

テレビ、新聞で先の第二次世界大戦で沢山の人が
亡くなり、広島、長崎への原爆投下がいかにすさま
じかったか、亡くなり、又、苦しんで生きてこれら
れた人達の話が伝わっている。

世界に戦争が一日も早く無くなる事を願ってやま
ない。

2025年8月13日

カリブ海の島々

梅澤輝也

カリブ海といえば、美しい海、陽気な音楽、大小
700以上の島、また海賊も思い浮かぶ。これらの

島の成り立ちは、大別すると火山活動、サンゴ礁の
隆起、大陸一部の海面上昇などに因る、そこには珊
瑚礁の白いビーチ、3,000m級の山、活火山、温
泉、平坦で豊かな土壌の島々がある。

コロンブス到達以降、この地域は欧州列強が
競って植民地化を進め、砂糖キビ、たばこ、綿花な
どの大規模農園にアフリカから奴隷が送り込まれ
た。20世紀に入ってから、独立や自治領への変貌
が歴史に見られる。この経緯から、ここには異なる
民族・文化の融合が生まれ、それがこの地域の特徴
となっている。

繊維に縁を食んだ私が、ここで真つ先に思いあた
るのは、シーアイランドコットン（海島綿）の産地、
バルバドス。恵まれた気候条件で育った、「幻の綿」
といわれる、この綿花は、一般のそれと比べ約2倍
の長い繊維でその織物は光沢のあるシルクのような肌
触りが特徴。エリザベス一世をはじめ英国王室に愛
用され、ひととき門外不出とされていた。

振り返ってみると私は、カリブ海の島とは縁があ
りそうだ。香港有力企業と合併で深圳に事業を立ち
上げたとき、会社の登記を収益非課税、タックスヘ

ブンにあやかっつて英領ヴァージンアイランドとし
た。また、横浜大根橋でボランテアをしていた頃、
多くの豪華客船が、税制優遇、雇用規制緩和の目的
でバハマを便宜上の船籍とし、船尾に母港ナッソと
表記していたのを度々目にした。退職してから始め

たウクレレ・ソロでは、ある日、ジャマイカ・フエア
ウエルの曲を指導者が手本に弾くと、ミ・ファ・ソ
それぞれを根音（土台の音）とする調和音が美しく
響き、とても印象的だった。そこで私も、と試みた
が指使いが難しく、貰った譜面はそのまま長い間放
置していた。今度こそは、市民センター恒例の発表
会で、あの和音が美しいメロディに挑戦しようと思
い立った。

さらに、カリブ海の島でもう一つ、トリニダード・
トバゴ。今年はじめ、息子がこの国に着任し、周辺
5つの島国も兼轄する職務に就いた。息子からは、
時折SNSで映像が届く——澄んだ海、青い
空、豊かな緑の樹木、多彩な珍しい鳥、植民地時代
のレトロな建物、市場の賑わい、楽器スチールパン
など、などの・・・

いま、練習に取り掛かったジャマイカ・フエア

ウエルの曲は「夕闇の街は賑い、陽は山に輝く・・・
だが、かなしいことに、すぐには行けぬ・・・」と、
歌っている。

93歳、わが身の様々な現実をみつめ、私の心は大
きく揺れ動いている。

まだ望みは、まだ捨てきれない、もう暫く夢を抱
き続けていこう。

終り

人間は必ずぶきがある

～親切さがある本当のかわいいところ～

大島聖力

人間は接客が笑顔であると二度、三度会いたい気
持ちになる。店員さんはお客様に対して教えてくれ
ている、案内をしてくれている。お客様は店員さん
の態度を見てとても感じが良いと思うと年下の店員
さんでも大切にしたい、見習いたいという気持ちに
なる。食堂やカフェや観光地や公共施設でも会社の

制服やユニフォームがある。店員さんとお客様の見ているところは笑顔と服そうである。服そうがビシッて決まっていると店員さんは気持ちが変わりあのお客様と接客したい、お客様は店員さんに対して大切にしたい、教育をさせてあげたい、育てることをしたいという気持ちになる。

人は相手に対して悪いようなことをすると言った人間に対して欠点が出てくる。人にたよるのではなく自分自身で見つける必要がある。人のせいにはしないことになる。深くいうと気があわない人間は、あいさつはされない、お話はしたくない、お話をしても何もおもしろみのないつまらない人間でいてもめいわくになるというくだらない人間と思われる。まともな人間、常識のある人間に対しては行なっている人間のことを絶対にこわすようなことはしない方が行なっている人間の身のためになる。

人は言われなくても約束をしていなくても必ず会ってくれる人間がいる。行動をしつかりしていることであり一日も欠けていないでお会いしてくれるということはあきらめていないところが本当の人間のグランプリなところ。実行している人間に対して

ノスタルジック尾瀬

大村 ひろし

「二人だけで尾瀬にいかうか」

「うん」

梅雨明け間近い夕餉の席で、中学二年生になった末娘とそんな会話を交わした日から二週間ほどして、ザックをとりだして準備を始めると、

「あれ、お父さん、本気だったの？」

と、茶目つ気たつぷりにとほけて見せながらも、いそいそと好みの携行食をザックにしのばせることを忘れない成長期の娘を連れて、七月の下旬、二十数年ぶりに尾瀬を訪れた。

懐中電灯の明かりを頼りに暗いうちに歩きだし、大清水から三平峠を経て着いた尾瀬沼は、すでに陽は昇っているのに、さざ波もなくひっそりと静かで、鏡のような水面に淡い青空と逆さの燧が岳をくっきりと映していた。

その沼を右手に見ながら木道伝いに白砂田代、段

は本当に行なっているところを思うと出会うべきでいつも出会ってくれてありがとうということに幸せなことになる。人間のしつかりしている本当のところは店員さんでも知り合いでも相手のことを一緒にいたい気持ちでいたいとしたらお客様に対して次回いつこられる予定でいますか？とか、もしお時間がありましたら教えてほしいです、というきつかけや出会いや幸せになることにつながっていく。人間にはハートを持っているが変な話でラブレター以上にしつかりした本心を持つことになる。それだけ行なっている人間の行動をしている者に対しては必ず守るべきこと。人間として常識でいること。あきらめていない人間には笑顔でほほえむことをやってあげることに。

お会いしてくれるという人間は気があう人間。想像以上に感じの良い人間と判断され言われなくてもこれから世の中のことがわかるようになる。本当の人間の本心は怒るよりもかわいいところ、てれくさそうなところ、体にもぶきがあるのでおかしくさせない方が人間の行ないの安心が出来ることになる。

小屋坂を経て見晴^{みはり}に向かったが、沼尻で沼尻平への道を右に見送ると、白い湿原が近づいてきた。

細い茎の先に白い毛玉をつけたワタスゲが群生する湿原で、時折吹き渡る風が、その綿帽子のような白い毛玉をゆらし、白いうねりをつくっていた。

立ち止まってその根元をみると、アサヒラン、ゴゼンタチバナ、コケモモ、チングルマなどの花も精一杯の表情で咲いていて、私が愛用していた古いニコン一眼レフの扱い方を覚えたばかりの娘は、その花々の前でカメラを構え、しばらくの間全くの唾になつていた。

ところどころにある池塘では、オゼコウホネが、品の良い淡黄色の花を水面に浮かべていた。

見晴に泊まった翌日、竜宮小屋の方に歩いてみた。小屋の近くの流れ沿いで肥大化してお化けのようになつたミズバショウを見かけて驚いたが、その先、山の鼻に近づくと、まるで遊園地で出会うような途切れ目のない動く嬌声の列や、置き去りにされたごみ、そして二本の木道の間には排泄物とちり紙までが待っていた。それは、私の記憶のなかにある尾瀬、娘に見せたかった尾瀬とは余りにもかけ離れた

た尾瀬だった。

それから数年後、尾瀬の湿原を見たことがないという妻を連れてまた尾瀬を訪れた。騒々しい時期を避けての晩秋で、雨あがりの朝の尾瀬沼には、朝霧が立ちこめ、水面に一群の水鳥が羽根を休めていて、辺りは、まだまどろみのなかにあるようだった。

尾瀬沼を左に見ての沼沿いの道は、散り敷いた落ち葉が雨水を吸ってしっとりとしていて、木道の切れ目から先はその柔らかな自然の絨毯の感触を靴底に感じながら長蔵小屋の前を抜けて浅湖湿原にでると、そこには一面に草紅葉が広がっていて、雲に陽射しを遮られ、陰影の乏しい樺色の景色の向こうから、冬の歌声が聞こえてくるようだった。

「カオマンガイ」を探して

きんめだい

忘れられない味というものがある。忘れていた記憶というのが正しいかもしれない。

私はこの料理とタイで出会った。父がタイで仕事をしていたので、その出張中に遊びに行ったのが5歳のころだった。ホテル住まいの父の部屋に母と2人で二週間滞在した。ホテルと言っても、ベッドのスプリングがギシギシする、エアコンの調子も良くない、三流ホテルのようだった。ホテルの周辺も雑多な雰囲気、タイの人々が生活する地域に近い場所だった。毎日の出来事がどんな風だったのかさっぱり覚えていないのだが、強烈に心に残る料理が「カオマンガイ」だった。父は仕事をしていたため、昼ご飯は母と2人で町に出かけた。町のいたるところにある食堂で「カオマンガイ」は家庭料理のような存在だった。鶏肉のゆで汁で炊いた白飯の上に、スライスした胡瓜と鶏肉を並べて、その上

に茶色のとろりとした液体が白飯・胡瓜・鶏肉の上にまんべんなくかけられていた。一口目で、鼻に広がる不思議な香辛料の味わいに驚いた。冷えた胡瓜と温かい鶏肉ご飯と茶色の液体が口の中で混じり合い、ただただ美味しくて夢中で食べた。日本に戻ってから「カオマンガイ」をねだる私に、毎日のように食べていたため味を覚えていたつもりの母が再現を試みたが、似ているようで似ていない料理となった。茶色の液体がどうしてもうまく作れないのだ。がっかりした私は、しばらくすると「カオマンガイ」を忘れてしまった。

この料理を思い出したのは大人になってから、エスニックブームが到来したからだ。アジアン、インドなど香辛料をふんだんに使った異国の味に、新しい食のブームが起きたのだ。私も都内の有名店や、口コミで美味しいという飲食店などに出かけ、また「カオマンガイ」をメニュー表に見つけることとなった。懐かしいな、どんな味だったっけ、という気持ちで口にしたのだが、思っていた味とは少し、いやかなり違っていた。大人になって味覚が変わったこともあるかもしれないが、現地の料理とは違う、どこ

か日本風にアレンジされた味に感じてしまった。これではない、この味ではないのだ、と心のざわつきが収まらなくなった。以来、「カオマンガイ」を色々なお店で見つけると注文して確かめずにはいられなくなった。あれから55年近く過ぎているが未だ出会えていない執着のある味なのだ。

もはやタイに行かないと出会えないのかもしれない。現地でしか味わえない何かがあるのかもしれない。味や香りや匂いは、出来事を思い出すきっかけになることが多いという。私はタイでの日々を「カオマンガイ」を食べることで思い出したいのかもしれない。目を閉じて薄ぼんやりと覚えている風景を、写真のようにはっきりと思い出せるのではないかと想ってしまうのだ。

スクエアダンスへの挑戦

久保田 文子

ママ友時代からの親友Yさんが二年間続けてきたスクエアダンス。見に来ないかと誘われ、社交ダンスのベテランSさんと一緒に興味津々、明治市民センターへ。

「大親友のお二人です」と紹介され暖かい笑顔と拍手に包まれる。同世代の方々も多く、二十数人の皆さんのダンスが始まる。四組のカップル八人が向かい合う。軽快な音楽と、コーラーさんのリズム感ある指示に従い前に後ろに、交差したり、腕を組み回ったり、どの方もとても楽しそう。

「一緒にやってみませんか？」との会長さんの呼びかけに、もはや断ることはできない。Sさんはスツと仲間入り。戸惑う私にはベテランの方がカップルになり、手を引いて下さる。

まずはご挨拶から。カップルと手を取りご挨拶。右隣、お向かいさんにもご挨拶。この始まりが何と

と感じた。

その数日後、箱根に帰省した折り、何と義姉が、「私はフラだけど、スクエアダンス知ってる。ドレスのスカートがふわつと広がっていて、箱根でもやっている人いるわよ」と。すごい！箱根でもと再認識した。

夜は粋な浴衣姿の義姉に付いて町内会館での盆踊りにくり出す。やぐら太鼓の音に合わせて輪になり踊る。「炭坑節」「キヨシのズンドコ」「東京音頭」これは踊れる。「箱根音頭」も久しぶり。さすがに最近の曲は見学。ピンクのロングドレスの若い女性のキレのよさ！着流しを翻し踊る背の高い男性のかっこよさ！ちびっ子の仕草の何とかかわいらしい！浴衣姿の女性の皆さん、同世代はここでも元気いっぱい、どの曲も休むことなくしなやかに踊る。やっぱり私に合うのは盆踊りかな。「でもスクエアダンスも挑戦よ」そんな声と共に、華やかな笑顔が目に見えん。

も暖かい。コーラーさんの指示は全て英語。「頭が混乱して間違えると八人全員に迷惑かけて。結構苦勞するのよ」何でもやりこなすYさんの弁はこのことだったのか。

リードしてくれる先輩は、私の腕を引いたり押したり組んだり。ほぼ立ちっぱなし状態の私も何とか踊るというか、歩く。左右の足、逆だと気づいても、もはや直せない。顔だけはともかくニコニコ。ふとSさんに目をやると既にすっかり馴染んでいる。足の運びも軽やか。やっぱりな！と思い、笑顔に笑顔で返す。

最後のフりは「お帰り！で、次はお散歩よ」と先輩。再び手を取り歩けば元の位置。そしてそと「お上手よ」はっこり嬉しくなる。

調べてみると、スクエアダンスは十七世紀初期、ヨーロッパからアメリカに移住した人々が、それぞれ自国のダンスを変化させて作り上げたのが始まりで、今や世界中の人々が楽しんでいるパズルの、マステゲーム的ダンスだとあった。連帯感、対話能力、認知症予防など健康効果も確かで、楽しそうに踊る皆さんを見ながら、間違いなく「生涯スポーツ」だ

私の着地点

慶野 千賀子

私は、桜の美しい奈良県で生まれ、間もなく家族で、父の故郷である京都府に戻り、京都府で育った。根っからの京都人の祖母が、自分が習いたかった日本舞踊を、孫の私に物心ついた頃から習わせて、自分の生きがいとしてくれたお陰で、日本文化を自然と身につけることが出来た。

東京都の大学に進学。卒業後は、都内で就職。

東京都は、様々な所から集った人々の街。都会のエネルギーを感じ、10年間東京都民となるが、ちよつと疲れを感じたのも事実だ。

神奈川県出身の、夫との結婚を機に、鎌倉市を選んで新生活をスタート。神奈川県民に仲間入りした。

鎌倉市は、タイムスリップしたような場所があり、歴史を感じる魅力ある土地だった。

でも、何故か私は住んでいる人達に、馴染めなかった。

その後、夫婦で公園が沢山あり、子育てしやすい環境が整っている、藤沢市に移り住み、この地で息子を産産。息子は藤沢生まれとなった。

気がつく、藤沢市での生活は、今年で30年。私の人生で、一番長く住んでいる地域だ。

海もあり自然豊かで、空を広々と感じることで、富士山もよく見える。藤沢産の果物や野菜も美味しい。綺麗な薔薇や蘭も栽培されている。温暖で、都会でもなければ田舎でもない。

若い人達の息吹が溢れ、四季折々の花が街を彩り、ホッとする様な優しさがある。

安住の地になりつつある、一番心地良い所だ。

藤沢で私は、多くの素敵な人に出会うことが出来た。

今までいろんな地に縁してきたけれども、私が見つけた私の着地点は、ここ藤沢。

父の思い出

小池 貴瓊子

私の父は僅か九才で三十六才の父親と死別した。長男の父は子供でも淋しい山道を独りで父親の薬を取りに郷の医者迄歩いたという。今と違い辺びな田舎道だったという。

晩年父は「俺は子供の頃から苦勞の連続だった。」と振り返っていた。自慢のようだけど父は今の神奈川県工業高校で学校始まって以来の秀才と謳われていたと、後に私が勤めた会社の先輩の父親が元同級生との事で聞き及び知った。学校を出てから「東芝」の女工監督となり多勢の若い娘達を指導して仇名が背が低いので「とっちゃん坊や」と呼ばれていたそうだ。家庭の事情で退職してから小学校の訓導となり、四年生の男子の担任をしていた。所がその教師となったのは私の生まれる前の事だ。父はおよそ妻子への愛情を表現しない冷淡な感じの人で心では

思っても外に出せない不器用な面があり本来子供好きではなかったようだ。昭和20年の五月、三才だった私を庭の防空壕に（B29が襲来したので）母は下の妹（夭折）を産んだばかりで父に私を防空壕に入れるよう頼んだ。私は真つ暗な壕に荷物のように小脇に抱えられてギヤァ／＼泣き叫ぶので父は「何を泣く／＼。」と怒り怒りその時の恐怖は今も尚心に刻まれている。私が十二才（小6）になった時、父は東京電力の藤沢営業所に勤務していたので独りでバスで来るように言った。目的はラーメンを食べたことがない私を遊行通りの三盛楼に連れて行ってくれたのはやはり親としての心情あつての事又高三の遠足の時も当時はバスが少なく父は自転車荷台に乗せて最寄りのバス停迄送ってくれた。成人（20才）となり選挙権が与えられて市民センター迄自転車に同乗して、投票を共にした思い出もある。私が20才になった事が心中嬉しかったのでしょうか？父の逸話で面白いのは50才位の時に薬局で髪につけるボマードを買おうとして若い女店員に「私がついこの間まで子供の時に流行ったボマード下さい。」と言ったら、女店員が思わず笑いこけて了ったとい

う。又どこかの駅で「向こうから背の低い醜い野暮な男が歩いてくるなあ。」と思ったら何と鏡に映った我が身である事に気付いたとよく喋っていた。七十四才迄元気で「関東電気保安協会」の嘱託社員として大きな施設の電気の検査の仕事に一心に励み「俺はどう／＼何も仕事らしい仕事も残さず終わってろう。」と淋しそうに呟いていた姿忘れられない。父の九十七才八ヶ月の人生は確かに幸福とは遠く辛く苦しい事が多かったと思うけれど。そして最後の最後まで心から安心して死んで行けなかった父の身を思う時、やはり娘としては父が可哀想でならない。憂き世は父にとり住みにくいことばかりだったと思う。立派な子孫に恵まれなかったのも父自身の不運と諦める他なかったと思う。全ては天の与えた「運命」と私は受けとめている。

「江の島、鶴沼の地を 散歩して思う事」

榊原 百合子

神奈川縣藤沢の地には、三大弁天の一つのすばらしい弁天像がある。江戸時代には江の島詣でにぎやう程盛況であった。その証明は浮世絵でもわかる。多くの江の島、藤沢の地の歌舞伎をみてもわかる。稚児ヶ淵は、神奈川五十選にも選ばれている絶佳の地である。

この地が歌舞伎の場面につかわれている。狂言にもこの地は使われている。黙阿弥は江の島の岩屋を取りあげている。そんな江の島を昔、父と姉と犬と一緒に何度も散歩した事を思い出した。江の島の帰りには鶴沼の東屋の跡、まだ池があり、少し小さな食事どころもあった。父が言う、「明治の頃、おやとい外国人が日本にきて、英語を教えているその中で、なかなかの人物いたんだ。ラフカディオ・ハーン、帰化して小泉八雲だよ」「江の島を海外に知らせ

た恩人だよ」「知られぬ日本の面影これは読むんだよ」「外国人が江の島を絶賛してくれるなんてうれしいじゃないか」と。「明治二十三年に来たんだよ」と。「鶴沼には明治三十一年だったかな、東屋に一ヶ月位逗留したんだよ」「鶴沼の海で泳ぎ、貝をひろい、蟹とたわむれて遊んだんだよ」「その頃の鶴沼の海は蟹気楼があらわれて芥川龍之介はその本までかいたんだよ」と。「よかったんだねその頃は」と。

あの子供の頃を思い出して、私は一人江の島、鶴沼の地を歩いてみた。子供の頃とは、すっかり変わっているが、父と姉とシェバードのエンマと散歩した事を思い出しながら、なにか頬をつたわる涙がでてきて、とまらなかった。あれから、何十年の月日が流れて、父が姉が良く言っていた小泉八雲の本をこの頃真剣に読んでいた。父や姉が言う様に漂泊の天才文士だといっていた事が理解出来る様になつてきた。やっぱり、ますます今後、くれゆく日本文化を、学び、守り、語りつがなければいけないと私は強く思いはじめたのである。

九月よりNHK朝ドラで「ばけばけ」が始まった。せつと八雲の松江での出会いからである。明治の士

族の苦しみ、近代化への歩みの日本のおやとい外国人の使命等々、これからが佳境に入ってくるだろう。とても楽しみだ。

朝ドラになつてうれしい。そして、ますます、私の江の島、鶴沼散歩も、明治時代の、八雲が人力車で、そして徒歩で、歩いた道を歴史をかみしめながら、歩く事しよう。

漂泊の文士であり、詩人であり、ジャーナリストであり、教育者であった八雲という人物も解剖し、その偉大さを私なりに発見してみたいと思うばかりである。

父と姉とシェバードのエンマと散歩した事が、今の胸のドキドキをしめる事に何か不思議を感じてならない。日本の松江、熊本、神戸、焼津、横浜、東京、そして湘南江の島、鶴沼の地を見聞した八雲に感謝を捧げたい。

「肉巻きいつ食べたんですか？」

白石 多美子

お母さん、いつ肉巻き食べたんですかと、ほろ酔いかげんになると、婿殿の旅の思い出の切り口が始まる。「旅の楽しさとは、何度も同じ話をしては笑い合えることが最高である」と、娘夫婦と同居してつくづく思う。

まず我が家の旅は私が行きたい所を決めて計画し、婿殿は食べたい物を探し出しお母さん、一日三食じゃ足りませんとうそぶく。そして出発。

その肉巻きとは伊勢を旅した時のことである。食にこだわりのある婿殿は、お腹が空いたからといってそばにある物を食べず。でも私達は我慢できない。

名古屋に泊り二日目、伊勢神宮に行くことになった。途中渋滞にはまったらと、コンビニでおにぎりらしい物に甘ダレの豚肉が巻いてある肉巻きを四個買い求めた。案の定知らない土地での渋滞

は心細い。さっそく三人で肉巻きを食べ、渋滞に耐えてやっと伊勢神宮に着き、ぐるり見学した。古の参道巨木の杉。参拝する人は多いが、なぜか静寂な気が漂っているように感じた。やつとお昼。伊勢うどんを初めて食べた。もう一度食べたい位美味しい。ゆつくりしたかったが、次へ娘と伊勢真珠の店へ何軒か回った。可愛いピアスを違うデザインで買いふたりでご機嫌である。

興味のない婿殿は、あっちこちの食べ物を見て、メンチカツをほうばりながら歩いているところを私達とドッキングした。「お母さん、今度来たら、あちらの牛肉鍋屋さんに食べに行きましょう」とうれしそう。本当に食べることが好きなのね。娘が赤福でお茶しようと言うのが長蛇の列。夕食は名古屋のひつまぶしを予約しているので、早々に帰るところにした。

車の中で私はウトウト。外はヘッドライトの光が続く。薄目でまだ渋滞してるのかとまどろんでいたら、お母さん、肉巻きはどうしましたかときた。「えっ」聞かれてびっくり。なぜかオドオドして、食べたいのと聞くとひとつ残ってたので気に

なつて。とつくに私のお腹の中に入ってしまった。眠気もさめ、こっそり食べたのを見つけた子供のように、オドオドして小さい声で、食べたよ。

頭の中は大変。お腹一杯お昼食べたでしょ、食意地はつて食べたの。いやいや別に食べたかったわけじゃない。もったいないから。心の中で理由をブツブツとつぶやく。いつ食べたのと、娘が追い打ちをかけるように聞いてくる。てっきり寝てたと思っただから、いつ食べたか気がつかなかったねと、前の座席のふたりに大笑いされた。

それから何かにつけ旅行の話になると、お母さん、知らない間に肉巻き食べてるだもと話が始まり、笑いの種となる。それも楽しい。いつ食べたっていいじゃないと私は反して笑いこぼれる。そんな話はいくつもあるので旅と話とお酒はつづくのである。

道連れ

杉山 榮子

何十年も前のこと、トニー谷という芸人がいた。黒の四角いフレームのメガネをかけて大きなソロバンを楽器のように振って調子を取り「アナタのお名前なんてえの」というフレーズを歌いまくる人気者だった。

私が秘書室勤務の時のこと、室長は受けた電話の第一声が「アナタのお名前さんは？」だったから、お名前さんというあだ名がついた。

昭和十七年生まれの私には同世代の友人に昭子と和子という名前の人が多い。昭和百年の今年からみれば十七年なんか昭和のスタート地点のようなものだから、希望にもえて昭和という文字を使って名付けたように思える。

母には十三人のいとこがいたが一番若い千という名前のいとこがいた。誰からも「センちゃん」と呼ばれていた。千ちゃんは自分の名前がイヤでイヤで

悩んだ末、名前の変更を決意し親に相談した。

父親は万造という名前。「万さん」と呼ばれていた。「俺が万だからオメエを千とつけたんだ。考え抜いた名前を替えたいとは何だ」ま、こんな風に答えたようだ。

万さんの姉は私の祖母でトラという名前だった。

父親の反対で名前の変更ができない千ちゃんは泣きながらトラさんに窮状を訴えた。千ちゃんはここで百万の見方を得たのだ。

トラさんは自分の名前が気に入らなくて、「おトラさん」と呼ばれるのが苦痛だったから弟の万造に「万よ、おメエは姉娘にミヨなんて良い名前をつけて、妹娘に千なんてつけるたあなんだ。かええそうに名前を替えてやれ」と、こんな風に説得したと思う。

晴れて千ちゃんは名前変更の許可を家庭裁判所からもらった。長後郵便局に勤めていた千ちゃんは、局長に新しい名づけ親を頼んだ。局長の答えがあるっている。「万の下の子がイヤなんだから、万の上の億、その又上の兆、チヨウコにしたらどうか。次郎長の女房もチヨウウといって良い女だったからよ」ウソのようなホントの話である。

千ちゃんは本当にチョウコという名前が気に入っていた。今までのなりゆきで「センちゃん」と呼ぶ人毎に「チョウコです！」と訂正した。氣立ての良い娘だと評判だった千ちゃんは信さんと結婚し二人の男の子を育てあげた。還暦を前にして胃ガンを患い亡くなってしまった。死期を覚った時、葬式は戒名ではなく俗名にして欲しいと信さんに頼んでいたから望み通り「林兆子」で葬式は行われた。赤毛のアンは「マリヲ、バラはバラ」という名前だからこんなにキレイなのよ。キャベツなんて名前だったから、きつとキレイではない花になってると思うの」と言った。

生まれてから死ぬまで、生涯自分につけられた名前はついてくる。いわば人生の道連れともいえる。心を込めてつけてくれた名前。もっと大切に地味でも良いから輝かせるような自分になっていかなくてはと自戒している。

瀬戸内紀行

須田とし子

2025年6月、3日間かけてツアーを利用して友人と二人で瀬戸内方面へ旅して来た。幸い雨は降らなかったが連日、30℃の気温で体力を消耗し大変疲れた。

一日目、新幹線で新横浜から乗り新神戸下車。北野異人館街を自由散策。淡路島へ行き淡路花さじき、うずの丘大鳴門記念館へ。夕食は付いていなかったのでも酒好きな友人と近くの居酒屋へ。私はレモンサワーなど飲んでる内に、顔と体がポワポワとなりユラユラしてきたので一杯でやめてひたすらおつまみなどを食べた。

友人は大酒飲みのようにで何杯もお酒のお替わりをするのを見てびっくり！

二日目、徳島の大塚国際美術館へ。世界26ヶ国、190余の美術館が所蔵する古代壁画から現代絵画まで至宝の西洋名画千点以上を原画と同寸大で陶板

で再現して展示してある。陶板は、窯で約8時間かけて焼く。茶わんやタイルと同じで土を使って焼いた陶器の板のこと。その陶板に1000℃以上の高温で焼きつけて再現したものが陶板壁画。2千年経っても色あせず色は鮮やかなまま。

展示室を全て歩くと4kmにもなる。特に、システイーナ礼拝堂のすごく高い天井の全面壁画には圧倒されるばかり。実際の名画をじかに見るが如くの迫力と臨場感を味わうことが出来、そのすばらしさに感動で胸が震えるほどだった。

三日目は小豆島、直島へ。オリブ公園では有名なギリシャ風車があり、「土庄」では港周辺のアート作品を見学。次に、アートの島直島へ。人口2900人の島へ年間70万人の客が訪れる最近、脚光を浴びている島だ。

草間彌生作の有名な赤カボチャ、黄カボチャは海のそばにあり絶好の写真映えスポットだ。至る所にアート作品のオブジェがありその他、数ヶ所に美術館がありさすが、アートの島と言われる所以である。

この3日間はどこへ行っても海外の客がいっぱい

だった。旅行はとても楽しくリフレッシュも出来るし思い出にも残るが、家に帰って来るとどつと疲れが出てくる。

これからも思う存分、旅を楽しむためには脳と内臓と足腰が丈夫なことが必須となってくることを実感した旅だった。

がんばれ湘南ベルマーレ

高橋章夫

湘南ベルマーレは元を辿れば1968年に創設された「フジタサッカークラブ」で1993年に始まったJリーグには1994年から1999年まではJ1で鎬を削ったものの2017年までJ1とJ2を行き来していて、数々の監督や選手たちがピッチの上でイノチの汗と幾多の涙を流し、日本サッカーリーグの星、つまり優勝を目指してひとりひとりが戦った。

サッカーという競技はただ単にボールを蹴り合うだけではなかった。球筋ともに様々な過去や想いが重なり、『キャプテン翼』という少年向け漫画に登場するのは1981年から少年ジャンプで連載されてきたもので、83年からはアニメ化もされて、サッカーは実に楽しいスポーツだということが日本だけではなく世界中に拡散されたのだ。

楽しいだけではなく、サッカールールに「オフサイド」というのがあり、プレーの中でゴールキーパー（GK）にひとりの選手が立ち向かうのはペナルティであり、もう一人GKに近い選手がいたらOKなのだ。サッカーにおいても得点して勝利するという事は、ひとりだけ足が速くても、パスの上手い人がひとりだけ、ひとりだけ背の高いヘディングの上手い人がいたとしてもなかなか勝つ事は難しいスポーツだと「湘南ベルマーレ」さんの歴史を振り返っても伝わってくる。

TV、近年では衛星放送とか各スマホアプリから中継放送も視聴することが気軽に出来るようになって

たのもあってサッカーは日本でも何かしらJリーグとか選手とかのニュースが流れるようになったけれど、1980年代には日本プロリーグもなかった。その状況でWカップに出場しようと試みたけれど、アジア予選というハードルがあったり、「ドーハの悲劇」でアディショナルタイムから失点された事もあったりした。

「キャプテン翼」の中で表現していたのは、日本代表がワールドカップに出場して、その延長線上にワールドカップの優勝もあった。それは実際に1998年フランスで開催されたWカップにおいて現実の日本代表が出場権を得るまでは作者の高橋陽一先生としての理想であり、サッカーファンの多くは単純に夢物語で、後に「横浜Fマリノス」の選手となる木村和司のフリーキックが韓国代表のゴールネットを揺らした時でさえ、韓国代表と日本のチーム力の差の大きさにWカップとの距離を感じずに居られなかった。

高橋陽一先生の描いたWカップでの日本代表の挑

戦はこれからも続くだろう。日本人と他の国の選手を比べたら、矢張り体格の違いがあるし、ひとつひとつのプレーに対しても丁寧さばかりとか謙虚さを求めたがる所が弱点とも言えるし、日本人だけが持つプレススタイルとなり得るかもしれない。

2018年から2025年現在までJ2リーグに降格せずにここまで続けてこれたのは、ホームタウンのひとつが藤沢市なので、

「今年もJ2に降格しませんように」と毎日お祈りしている為というのもあるかも知れないのだが、今年はどうだろう……勝利の女神様いらつしやいますか？

怖いよ

竹内圭子

怖がりである。物覚えがついた頃から現在までずっと。

倉敷にある実家は三百坪もある大きな家だった。

五、六歳の頃のある夏の夜、昔の家特有の広い下で、草木が生い茂った庭を見ていると木の間がピカッと光った。体が固まった。光の中から何も出てこなかったが、あれはいったい何だったのだろう。次はイタリアのヴェニスのホテル、夜、娘と二人でベッドに寝ていたら体が重苦しい。何かが上に乗っかっているようだ。目を開けようとしたが開けられない。ワウーと叫んだらしい。娘が「どうしたの？」と体をゆすつてくれて目が覚めた。金縛りか。電氣をつけて寝ていたが何故か電氣が消えていた。翌日、そのことを添乗員さんに話すと、「イタリアのお化けは電氣をつけたら消したりするんですよ。」ひえっ！

極めつけは二、三年前のこと、リビングの端っこの隙間に死神の電氣がした。顔も体も見えない。電氣だけである。いよいよ迎えかと思つたがまだあの世に逝きたくない。姪っ子に相談したら風水を教えてください。黄色いもの、鈴のように音がするもの、家族の写真、そして観葉植物を置く。置いてみた。あから不思議、電氣が無くなった。これはいわる思ひ込みだろうか。

幸いなことに私には靈感がない。わがムコ殿には靈感があつて、返子の家にいた頃、井戸から黒い人影が出てきてリビングのドアの前を通り抜け、玄関に行くのを見たそうだ。
怖いよ。

菜の花のへんろ道

竜田 孝則

帰郷したとき、母の供養もかねて、五番さんの地藏寺まで行ってみようかと思いついた。

五番さんへは、菜の花畑の間を縫うように遍路道を歩いていく。昔笠に白衣のお遍路さんたちが、菜の花の間に見え隠れして歩く様子は、心がほどこけるような光景である。

五番さんは、小高い山のおもとにある。本堂の左の石段を登った高台に、奥の院の五百羅漢堂がある。五百羅漢堂は、正面の釈迦堂と大師堂、弥勒堂を廻廊でつなげたコの字型の建物である。五百羅漢

像は、その廻廊に祀られている。廻廊には窓がなく、提灯の灯りが羅漢さんをほんやりと照らしているだけである。羅漢さんは、腰ほどの高さの基壇に祀られている。ほのかな灯りに浮かびあがる羅漢さんは、鮮やかに彩色された、等身大の木像である。提灯の灯りのせい、肉感的ですらある。血色のよい頬、濃い垂れ眉、にやつき物欲しそうな分厚い唇、赤、青、緑や金色に彩色された派手な衣と、かなり怪しげな羅漢さんもおいでだ。薄暗い中にこんな羅漢さんがズラリと浮かび上がってくると、申し訳ないが、少々薄気味悪くすらなってくる。

羅漢さんたちがおいでになる廻廊に足をふみいれると、ひんやりとしたかび臭い空気に包まれる。薄暗い廻廊は、先に行くほどほの暗くなっていた。目をこらして廻廊の先を見ると、女の子が二人先のほうを歩いている。しっかりと腕を組み、ほとんど走り出しそうであつた。二人は珍しいことに着物姿で下駄はきだ。私は、つい足早になり、後を追うような形になつてしまった。すると、女の子たちは悲鳴をあげ、下駄の音をカタカタならしながら走りはじめた。そして、すぐ近くの引き戸をあけ、外に走りだ

していつてしまった。謝ろうと思つてあとを追つて

外を覗いてみたが、庭には誰も見当たらなかった。

一歩外へ踏み出した途端、強い風が音を立て山の上から吹きおろしてきた。風は庭の木々を大きく揺らせ、砂を巻き上げて目前に広々と広がる沃野の大空に吹きあげていった。女の子たちの笑いさんざめく声が風とともに大空のかなたへと遠ざかつていったように聞こえたのは、私の錯覚だったのだろうか。

ふと、母の言葉を思い出した。「そろそろおとしゅうてなあ、友達と二人でとび出してしようたんぜ。外に出たらなんやらおかしゅうて二人で笑い転げてしようたわ」。

私はその場に立ち尽くしてしまった。

人は生まれ生まれ、死に死に死んでは、また生まれる。そして時の廻廊を幻のように流れ過ぎていく。私もそのあわいにたゆとう幻にすぎない。時の廻廊のなかでは、現在や過去、未来という区別など、あまり大きな意味をもたないのかもしれない。そんなこの世の秘密を垣間見てしまったのかもしれない。

「三島由紀夫生誕百年に思うこと」

富安 千鶴子

今年は戦後八〇年、原爆投下八〇年、昭和百年、ラジオ放送開始百年になる。この年、日本の近現代史、文士達の歴史に思いをはせてみた。私の住む鶴沼には、かつて東屋という文士の逗留宿があつた。芸術文化発祥の場所といつても過言ではない。三島由紀夫も、鶴沼に親戚が居していた関係から、何度かおとずれたと聞いている。秋空の雲の美しさをながめながら、少しばかり木々が色づいている鶴沼の散歩をしながら私は考えた。日本の文士の歴史の中、おそらく一位、二位を占めるであろうと思われる三島由紀夫。勿論私が思うのである。三島は昭和四十五年十一月二十五日自死した。三島事件である。時の総理大臣は狂気の事件となげいた。当然だろう。

世の中は震撼した。しかし、天才文士の仕事は国際の評価は高く三島研究、三島学はゆるぎないもの

である。著書、原稿、幼少期よりのノート、戯曲、舞台、映画に至るまで、天才振りを発揮している。作品に流れる旋律は日本人特有の美しさが感じられる。三島の最後の時はドラマチックで激烈だ。批判する人も多いだろう。三島の人生をみると、戦争という背景、そして敗戦の背景が三島にとって大きなものであったに違いない。昭和二十三年発表した「仮面の告白」は、三島自身が遺言だと言っていた事をもってみてもわかる。

昭和三十三年結婚、日本画家杉山寧画伯の長女である。日本女子大学在学中の見合い、結婚、川端康成が媒酌人であった。川端は文学上の師であった。これから、幸福な家庭生活が続くはずであったろう。しかし、天才文士の人生は死の彷徨へと舵をきってしまった。三島の死を思いながら、昭和という時代を考えざるをえないのである。そして、生きて、日本、海外への文壇、評論への道を極めてほしかったと思うばかりの心の内である。

今年の夏の終り、日本経済新聞社の論説委員で大学教授、ジャーナリストの知人が三島由紀夫大賞を授賞された。「三島由紀夫の迷宮」という著書であ

もしもあの時 わが一命は？

西野 洋 司

わが家では昔から先祖の残した畑が、家から五分ほどの山王町にあり、父は郵便局勤務だったので土曜日は「半ドン」といって午後には家に戻り、払下げのボロリヤカーに堆肥と下肥を積んで、まだ幼かった私が後を押して度々通った。作物は小麦、粟、玉葱、甘藷、トマトなどだった。

私は農作物に飽きると下の田圃の中を流れる小川へゆき、泥鰌やお玉杓子、海老を捕まえて遊んだ。

そしてもう戦争も終り近い頃だった。どういう縁だったかは聞かなかったが、家から一里ほどもある円行という処に無料で貸してくれる畑があり、父とよく通った。あの頃戦争で多くの若者が兵役に取られ各地に畑が空いていた。草を生やして置くより使ってもらっていた方がいいと聴いていた。

私は小学四年生、大して役にはたたなかっただろうけれどよく麦踏みさせられた覚えがある。父も

る。九月後半、記者クラブの授賞の折スピーチを頼まれた。理由は私の大叔父が東大の医師で韓国の病院長、樺太病院長で三島の祖父の樺太庁官の交友や、三島夫人の父上杉山寧画伯に日本画を師事していた事が理由である。私が三島夫人に初めて声をかけられた言葉、「貴女が父が認めたお弟子さんね」だった。私は三島夫人のご死去の折、白亜の邸宅にまいった。そして、その帰り道に三島由紀夫夫妻の運命を考えながら、帰途についた事などをスピーチした。翌日、「仮面の告白」を本棚から取り出して、読みかえた。

天才文士三島は今後もやはり国内、国外当然ながら、永遠の輝きをはなつ事だろうと確信した。

一人でするよりは楽しかったのであろう。そんなある日の夕方近くリヤカーを引いて家に戻る途中、亀井野の現在の「ワイワイ」のあたりだったろうか、当時町田へ続くあの路は土地の人は「軍道」と呼び細かい砂利が敷かれていたが、アスファルトにはなっていない、側溝にはなぜか蓋がなかった。すると背後からビューンという飛行音、父は私を側溝に投げ込み小柄な自分も跳び込んだ。すぐ前方の畑に土煙りが上がり、二機の胴太のグラマン戦闘機が手の届くような高さを南へ飛んでいた。私は意外と冷静だった。二人の飛行士が失敗したせいかな笑い合っていた。

父は若き日遊行通りの映画劇場裏の方にあった長谷川柔道場に通った黒帯で。腰ひねりの西野という特技があったという。こんな時それが役立ったのかも知れない。思い出す度に感謝の念が込み上げてくる事件だった。

「文芸ふじさわ」編集委員を

辞するにあたって

新田 愼 二

このたび病を得て編集委員を辞することになった。約十五年間「文芸ふじさわ」と係わってきたが、特に後半の約十年間は「随筆」の編集委員を受けることになり、私の意識下では大きな位置を占めるようになっていた。

やり始めて数年は応募数の確保に意を注いだ。もともと投稿者のうち半数以上が前年からの継続投稿者で、新しく書いてみようという人が少なかつた。いかに新規投稿者を増やすか、それを優先課題として取りこんだ。

所属していた「文芸サークル仲間」へは当然として、「大学の校友会仲間」、「団地の知人」、「図書館の事務員」、「近隣の高校」にまで足を伸ばした。退職後初めてこの地に來たので、知り合いも少なく苦労した。

ことになってしまった人もいた。これらの人達のやる気を何とか育てたいと思っていたのだが……。

文章が集まると読む作業が始まる。初めて書き始めた人が経験を積むたびに上達していくのにも喜びを感じた。誤字脱字、句読点の打ち方、題名の付け方、起承転結など、構成や内容が素晴らしいようになってゆく、事務局のご努力により、四月に冊子が出来上がる、もう一度読み返しながら冊子をなでる、うれしい瞬間である。

このような文芸冊子を発行してくれる藤沢市みらい創造財団に強く敬意を感じている。スタッフのご尽力によるものだろうが、先年藤沢市長より感謝状もいただいた。私はこれをもって編集委員を去ることになるが「文芸ふじさわ」が市民の文芸意欲を高め、歴史や自然に恵まれた藤沢市が、さらに文化度の高い都市になるよう祈念している。

そこで最も注力したのが朝の散歩の人々であった。

家の近くに「引地川親水公園」という素晴らしい公園があつて、早朝から多くの人たちが運動のため來園していた。この人たちに応募を勧めたのである。募集チラシをもって勧めるので、初めての人であっても、わりと気軽に話しかけることができた。聞いてはくれるが「やっぱり無理」と断る人が大半で、意外に難しいことを悟らされた。無理もない、手紙さえ書かなくなつてスマホで簡単に発信できるからなのだろうと。

しかしその過程で多くの友人ができるなど、思わぬ収穫にも恵まれた。やつてみようと思つてくれた人は思い出すだけで約二十名になり、朝のウォーキングを豊かにしてくれた。歩いている人たちはじつに多様な人達で、その人達との会話は楽しいものであつた。サラリーマン時代、同一職種の人達と過ごしてきた私にとって、それは新鮮で刺激的な時間でもあつた。残念だつたことは、せっかく書く気になつても説明しているうちに、その人が資格要件外だつたことで、同じ団地であつても隣町で、以前は市内サークルに属していたが辞めたため要件を欠く

骨折

ネ コ ス ケ

日課となつてゐる引地川親水公園へ散歩に向かう途中でつまずき、両手両膝をつく転倒をしてしまいました。動揺と痛さとはずかしさで、一刻も早くその場から立ち去りたいという気持ちで、なんとか家まで引き返すことができました。

よく見ればズボンは破れ、左足には出血をとまなう傷が見られました。骨折？も頭をよぎりましたが、激しい痛みもなくゆつくり歩ける状態だつたので、その日はとりあえず様子を見ることにしました。

しかし翌日、左足の膝周辺は腫れあがつてしまい整形外科を受診し、レントゲンを撮るとやはり骨折でした。手術をする程ではなかつたのですが、骨が付くまで太ももから足首までのサポーターを装着し、固定することとなりました。その時は、痛みよりもほんの些細なことで骨折してしまった自分が、

とても情けなく思いました。

以前、同世代の友人から階段を踏み外して骨折した、車のドアに手を挟んで中指を骨折した、などの話を聞きましたが、日常生活の中でも、骨折の危険は十分にあるという恐ろしさに改めて気付きました。

外出は可能でしたが、バリアフリー化が進んできたとはいえ、道路や建物にはまだまだ小さな段差があります。また私の家の門扉から玄関までの階段には手すりがありません。この機会に、住宅の見直しも必要だと思いました。

約二ヶ月でようやく骨はつきましたが、今度は骨密度が低下し、骨粗鬆症の診断が下され、さらに大きなショックを受けました。

治療法は骨密度を高める注射を月に一度、一年かけて打っていくというものです。その他、カルシウム、ビタミンDやK、タンパク質を摂取する食事療法と、散歩や片足立ちの運動療法も効果的だそうです。

まさか自分が骨粗鬆症だったなんて・・・一時は落ち込みましたが、骨折をしなければ気付かなかっ

たことです。逆に考えれば早期に見つかり、治療も受けられてよかったのかもしれない。

半年が過ぎ歩行も安定し、ようやく引地川親水公園にも行かれるようになりました。久々にお会いした皆様に温かい言葉をかけて頂き、感謝の気持ちで一杯になりました。

まだ治療を始めたばかりですが、食事や運動も取り入れて、私の骨が元気に育っていつてほしいと思っています。

日々雑感 そのⅡ

蓮池 高夫

いつの間にか79才になってしまった。

「長く生きた」という感じが、時々頭を過ぎる。

バス・ストマイ・ヒドラジッド、聞いたコトのない単語、私は8才の時からこの言葉を忘れていない。忘れられないのだ。

昭和二十年代、三十年代に当時を席卷した結核の

特效薬だ、因みにストマイとはスプレストマイシンという注射の薬だ。毎週尻に打たれた。痛かった。

私は、昭和21年の夏に生まれ、8才の秋感染「小学一年生」入院した。入院施設は住んでいた所から二時間ほどの小さな診療所の離れた一角にあった。

病棟は、小高い丘の上にあり、人家、人里からは距離のある隔離病棟だ。木造平屋の小さな家だ。まんな中に廊下、便所と洗面所は共同で、風呂は無い。片側に8帖の間が2つ、畳敷きの室、そこへ布団を敷いて、母と3才の妹、3人での生活が始まった。父は仕事があるので一人での生活だ。

まあ、3千円ぐらいで泊まれる簡易宿泊施設を想像して欲しい。

食事は、長い廊下を通って、父の勤めている会社の寮にある食堂の厨房から、母が毎日運んでくれた。

看護師さんは、特別の時以外は来ない、全ての看護は母の手に委ねられた。

母は、私の四六時中の看護、妹の世話、離れて暮す父の世話と、本当に大変な日々であった。

入院患者は私の他に、近くに住んでいた二年下の男の子、高齢の女性、品の良い笑顔の絶えない優し

い感じの方だった。たぶん60代後半か70才代初めぐらいかな。旦那さんがよく看護されていた。の三組であった。

その品のよいオバサンは、ご主人の期待する早期快方に向けての治療法を受け入れて、肺の手術に踏み切った。

うまくは行かなかった。オバサンは体力的に手術に耐えられず、術後、息を引きとった。悲しい出来事だった。

旦那は、悄然としながら病棟を去っていった。夫婦とはかようなものかと、今にして、思う。

雪の深い、風の強い所であったが子供心にはさほど苦にはならなかった。そこ以外の土地のことは全く知らないのだから、それが毎日のことであっても自然なのだと感じていたのだ。何もない、夏・秋と季節は見えても、荒涼に近い風景だった。

入院生活は二年に及んだ。その後、自宅での療養がしばらく続き、かれこれ三年ぐらい学校には通えなかった。

入院中には、いろいろなドラマがあったが、折を見て書き留めることとしたい。

昭和100年の今年、70年前の子供時代の記憶だ。只、父母の労苦を思うと忸怩たるものが募る。
了。

今日このごろ

畑 昌子

夜汽車の窓明らかにあのあたり——。父と母兄弟五人で過ごした所。あの頃は何もなくそれだつて楽しくやったヨ——メロディの歌詩そのまゝに大きな盤に井戸水を汲み弟達の学生服の袖を力いっぱい洗った。

井戸の中に西瓜を下げて覗いた日。いろんな具材の入った闇カレー//を電球の下笑いながら食べたあの日。努力すれば何でも手に入るこのごろ——。私はベランダから列車を見る六時半雨戸を開ける。犬に曳かれて植木場からアスファルトの道へ、いつもの雀が三羽ついて来る、カラスのカー子も電線の上から見ている。娘が「空ちゃんはダッコして鳥達を

見る」と言うのヨ、えーッどういう事と言いつ、「空だつこするか？」にお座りして上目つかいに私を見る。仕方ないナーばやきながら抱き上げると電線に止っている鳩もカラスも雀も足の黄色い鳥達もじつと見つめ合っている。何だこの犬は……。犬は外で飼うものと思っていたが我が家の一室はこの空海さまに占められてしまった。雀の話を前回したがあれから親から子へ雀達は私の車を追って来る。御殿場に「はな」という喫茶店がある。そのコヒーは事の他うまいノカウンターの客とも仲良くなり、ドライブの好きな私は娘とよく客になる。九十を超える方が写真や絵を見に寄つてとマンションに誘われた、立派な室に所狭しと御自分の作品が並んでいる、この室の他もう一つ自分の室があるのだそう、目を瞠るマンションに訪ねる人がいないのかな——と。

弥勒寺町のセボネ「水道みち」

林 田 繁 雄

弥勒寺の町にはセボネがあります。

岡の上から南に向かつて下り、東海道線にぶつかるまで、南北を貫く道路がセボネです。巾4m足らずのセンターラインもない生活道路ですが、「水道みち」と呼んで親しまれています。

半世紀前に越して来た時、まだ町にはなつておらず、字(あざ)を使っていました。

300m先の東海道線まで見通せる程、空地ばかりでした。水道みちは目印のように働き、位置関係を説明するのに便利でした。みんな水道みちを頼りにして来ました。

現在でも、「キミのうち、どの辺？」「水道みちをチョット上がって5階建てのマンションを右に曲がって10メートルあたり」

水道みちを中心に位置関係がすぐに呑み込めていいます。

この水道みち、実は、近代の歴史的遺産なのです。正式名「横須賀軍港水道」日本海軍が軍艦に新鮮な水を供給するための水道管を埋設した道路なのです。明治45年工事着工、大正10年完成。神奈川県愛川村半原から横須賀の逸見浄水場まで53キロ。川にさえぎられれば、水道橋となり、山にぶち当たればトンネルを貫き送水する。地図を見て、確かめるとおもしろいです。交叉点は、しばしば直交していなくて、斜めに交わったり、寄つたと思つた道路がまた離れたり、全て、水道みちの都合を優先しているのです。

戦後は横須賀市に移管され、平成19年4月まで使われました。つまり、我が家が越して来た時には、まだ水道は生きていたのだ。

弥勒寺町周辺には、舗装はされていても、まだ拡張されていない水道みちも残っています。その路肩に、この道路が、軍港水道であつたという証拠の遺跡が幾つか見つけられました。

おでこの笑いじわのような三角波に「海」が彫り込まれた石標です。道路脇の人家の塀の下などに、ひっそりと埋め込まれています。

今回、インターネット等で調べてみて分かったことは、水道の出発地も終点も、だいぶ変わって来ているらしい、でも歴史的遺産ということも意識していると読み取れました。

全長53km、北へ30km海沿いへ東に20km、藤沢弥勒寺町は、その中央の良い所に位置しています。各地で水道みちがどのように生活に結びついているのか、確かめに行こうと思っています。

私的 お医者さん 考 1

ヒラサワ タカシ

2025年4月。「带状疱疹」にかかった。ここあたりがあるような、ないような、アレルギー疾患である。

4月10日ごろ、普段は食べない弁当を食べた。特注の弁当である。特注なので、初めて食べるような食材も使われている。

で、お薬を塗りましょう。」と、言ってくれた。

それから 毎日 朝いちばんか、午後の診療時間にあわせて、医者に通った。連休の時期でもあり、合間に、毎日通った。

看護師さんも、「少しは かゆみ、治まりましたか」と言つて、丁寧に薬を塗ってくれた。先生にも、診ていただいた。

5月10日ごろ、発疹は収まった。忙しい中、先生の「毎日でも 診ますよ」の言葉に甘えての医者通いだった。先生の的確な診断と治療に感謝する次第だ。

再発はしていないが、忙しい中、診て下さった先生に感謝している。

なにこども、分を過ぎると体によくないと肝に銘じ、気をつけている。

大手のお弁当屋さんの特注のお弁当。ちよつと値も張るが、おいしいだろうと、二つ買い、昼と夜に食べた。おいしかった。

それから 2、3日して、なんとなく、腰のあたりがかゆい。季節も春先だから、「そんなこともあるかな」と、思った。だんだん、背中から肩のあたりも かゆくなってきた。

20日の午後、風呂に入るため、裸になったら、半身赤い発疹に覆われている。

「これは 大変だ」と、すぐに いつもお世話になる 皮膚科の先生のもとに 連絡をした。すぐに診てもらえた。

「ここあたりは ありますか。」とお医者さんは言った。

「多分、特注の 弁当かと。」と 答えた。

お医者さんが、「塗り薬と お薬を出しましょう。手がご不自由なようなので、毎日でもいいの

電車通学にはご用心

藤城 くに

昭和四〇年代初め、私は高校生になった。

電車通学するのを楽しみに期待していたのだが、その思いが甘かったことに気付くのに時間はかからなかった。

その頃の朝のラッシュアワーにはすさまじいものがあつた。電車がホームに到着し、下車する人たちが全員降りきるや否や、列を作つて待っていた人たちが我先にとドツと車内になだれ込み、ボートと立っていると否が応でも自動的に奥の方へと送り込まれてしまう。

もうどう見ても満員なのに、無理やり乗り込もうとする人の背中を駅員が足を踏ん張って両手で押し、何とかドアが閉まるのだった。

電車が走り出すと、車体が前後左右に揺れるものだから、不安定な足元を何とかしつかり保とうと、常に重心の置き方に気を配らなければならな

かった。

時にはカバンが人と人の間に挟まれたまま持つて行かれそうになり、やつとのことを持ち手を握って耐えた。他人と接触したまま次の駅までじっとしているほかは無かった。

下車駅で降りようとしたら、ドアに近づく前に、乗車する人の波に再び奥へと押し返され、ドアが閉まってしまったことがあった。

次の駅でどうしても降りようと少し進んだら、今度は同時に降りようとする人たちに囲まれ、もみくちゃになったまま、あれよという間に車外に放り出されていた。

そこから一駅戻ったのでは遅刻してしまうので、二駅を結ぶバスに乗って学校前で降りようと考えた。同じ制服が目立つ列を探し、いかにもいつも利用しているような顔をして乗り込み、無事に学校に着いた。

下校時は混雑が無く楽だったので、座って本を読むのが常だった。

そんなある時、そろそろ降りる駅が近付いた頃だと思い顔を上げると、車窓からの眺めに違和感が

ズンバは楽しい健康体操

松本 実知子

地域ささえあいセンター「きらり」が近所に出来てから、ちぎり絵、ピラティス、スマホ相談等で色々利用してきた。

何より自宅から歩いて5分の近さが良い。参加費が無料なのも助かる。残念なのは、ほとんどのものが月一回なので、体操には物足りない。しかし、今のところ他で週一の体操サークルにも参加している。整形外科のリハビリにも通っている。もともと、体操サークルの方は場所が少々遠いので、たびたびさはりつつも何とか続けている程度だ。

リハビリは、一般的な体操とは意味合いが違うが、それでも終わった後は、関節に油をさしたように足取りが軽くなり気持ち良い。体操サークルも行くまでは面倒だが、帰りは心地良い疲れを感じながら歩く。

やはり、年を取ったら意識的に体を動かす必要が

あった。しまった、電車は次の駅のホームに滑り込んでいくところだった。

ここで慌てた様子をするのはみっともないので何食わぬ顔で下車し、精算を済ませて改札口から外に出た。

その駅からも、一駅戻ると戻りすぎになるので、やはりバスで中間の家近くにある停留所を目指すことにした。その路線は途中海沿いを走る区間があり、おかげでドライブ気分を味わって、いつもとは違う新鮮な経験が出来た。

その時は失敗に違いなかったが、今となっては通学にまつわる懐かしい思い出だ。今、電車で通学と同じ区間をたどる時、車窓からの風景の変わりように驚きながら、私の眼はそのころの面影を探している。

あると思っていた時に、「きらり」の予定表で見つけたのが「ズンバ」だった。南米の音楽に合わせて、エクササイズをするというのに興味を引かれた。

音楽に合わせて体を動かすといえば、駅前のビルでやっている音楽教室でも似たようなことをしている。これはシニア向けで楽譜が読めなくても大丈夫という宣伝文句に惹かれた。内容はシニアが良く耳にしたことがある歌をうたいながら、ステップを踏む、歌が主で、体を動かすのは従だろうか。中には早くてついていくのが大変な動きもあるが、失敗しても皆で笑いあうのが楽しい。これも始めてから二年は過ぎた。

そんな下地もあり、音楽に合わせて体を動かすという「ズンバ」を体験したくなり申し込んだ。

当日会場に着くと、知り合いの女性が目に入った。近所に住むピアノの先生で、息子同士も友人である。言葉を交わすのは久しぶりだが、元気いっぱいのような。十一月から参加しているとのことだ。会場は狭いので定員は一八名で、全員参加だ。

「ズンバ」はラテン系の音楽をダンスと組み合わせ、創作されたエクササイズだ。コロンビアで考案

され、世界に広まったとネットに出ていた。

最初は、聴きなれない音楽のリズムに合わせるのは難しかったが、先生に導かれて体を動かすのは楽しかった。ステップと共に、手を大きく動かすことが多いので肩こり解消にもなりそうだった。手を振り下ろす動作は、サトウキビを刈る動作を表しているとのこと。ますます異国情緒を感じる。今までの体操とは一味違った雰囲気面白い。

今回は五月一二日で予約受付は二一日からだ。早めに予約しよう。

人生の応援旗

松 与 常 清

「忍耐すること、辛抱すること。そんなことはわけないことだ——ちえつ、なんて苦労性な」「堪え忍ぶことがすべてなのだ」「きみの最も苦しい経験はなに?」「生まれたからには生きねばならぬ」「ままにならぬが浮世」「苦痛と至福とは同じ神の顔の

二つの側面である」「苦痛というのは、詩的な価値と同様、人間の価値にとってもその本質的な源泉である」「これらの語句によって大方私の人生は支えられている。私の苦難などたいしたものではないかもしれないが、それなりに私の人生の風雨をしのいでいる。といって、これらの語句で人生万般のことが解決する訳でもない。

私は「爽やかに心の牧歌奏でつつ」「大晦日こゝに生きとし生けるもの」「下萌えぬ人間それに従ひぬ」の句を好み、そういう世界に憧れるものである。

しかし、私の現実には「煩惱の渦巻く長き夜の坐禅」「さばかりの事に死ぬるや」「さばかりの事に生くるや」「止せ止せ問答」と云った類のことが多いのである。

これらの現実を超える為にも先に述べた語句が必要となってくるのである。自戒の為とも指標とも云えるのである。

人生の悲喜、哀歓の中で、人間は悲や哀に直面する方が多いだろう。確かに「地球一万余回転冬日にこゝ」ということもあるかもしれないが「人の世の悲し」とと蛸が」と思うことが多いかもしれない。

ない。

人間は自分の弱さ悲しさを知った時、人生の杖、人生の支えを必要とするのではないだろうか。私は私の人生の中で万能薬とは云えないかもしれないが、引用した諸語句を思うのである。心がもろく挫け易くなった時、思うのである。他者の言葉、語句の引用、ヒントであろうと鼓舞に近いものを感じるのである。共感というか共鳴というか、心の琴線に触れる言葉や語句に出会えることは、ある種の幸いではなからうか。

人間はそれによってカタルシス、もしくは癒やしを感じ得るのではなからうか。

たとえ現世に地獄を見出したとしても、人生の真清水、人生の泉に触れ得た思いをするのではなからうか。

人生に人間に愛を感じ得るのではなからうか。

七十六歳の今、私は、若い時聴いたある方の言葉を思い出し反芻するのである。

「いろいろあっても、結局人間が好きでなけりやならないんだよ」という言葉である。

時に、人生否定、人間否定に陥ることがあっても、

この言葉と、冒頭に引用した語句等をもって、私は私の人生の応援旗ともしているのである。どんな人生の強風に会っても、倒れないことを祈念しつつ愛と勇気をもって人生の諸苦難、万難を排していけるようにと。

思い出

儘 田 加 寿 子

アメリカ、ロサンゼルス郊外のガーデナ市に、私の勤めた、ガーデナ日本語学園が、あります。歴史は古く、日系の人々が、努力して作った学校です。その日本語教師として10年間子供達に日本語をおしえました。はじめは、どうすれば、子供達は心を開いてくれるのかと思いましたが、しかし何事も我慢、と思います。子供達が笑顔を出すように、なっけてクラスは明るくなりました。クラスの中で、孤立している子は、いないかと気をくばりました。日本語学校で運動会、盆踊り、おもちつき、お話し会、日

本の小学校の行事をアメリカ生まれの子供達が目を輝かせてやりました。子供は、どこでも同じで、素直です。もう一度、皆んなに会いたい。

あの教だんに立って、日本語で、あいさつをした。

魔法の紙

室川 俊雄

五十代の頃のある日、右肩が急に痛くなった。しばらく様子を見ていたが治らないので、近くのY整形外科を受診した。

かなり高齢の先生は、右肩を動かして痛みの程度を聞いただけで、「四十肩ですな」と即時に診断した。先生曰く、五十歳でも六十歳でも「四十肩」とのこと。治療法はこれですと一枚の紙を渡された。処方箋と思いきや、「アイロン体操」との表題で二つの絵が記載されている紙一枚。左手をテーブルについて体を少し前傾し、右手でアイロンを前後左右

に動かしている絵と、アイロンで円を描いている絵の二種類があるだけ。拍子抜けして絵を見ている私に先生が言った。

「この絵のようにアイロンを動かす。これがアイロン体操です。四十肩はこれを毎日やれば治ります」レントゲン撮影も、薬の処方もなく、診察はあっけなく十分余りで終了した。

家に帰り、紙のとおりアイロンを振り動かしてみてもすぐに、アイロンが軽すぎるのに気が付いた。当時すでに、アイロンは合成樹脂製の軽いスチームアイロンになっていたのだが、老先生は重い金属製アイロンしか知らなかったようだ。

駅前のスポーツ用品店に行き、昔のアイロンの重さを出しながら同じ程度の重さの鉄アレイを買った。そして半信半疑で、渡された紙の通りに、毎日、「アイロン体操」ならぬ「鉄アレイ体操」を続けた。すると、三週間余りで右肩痛は完全に消えてしまい、あまりの効果に驚いた。

その後、肩痛で病院を受診した何人かの友人に聞いてみたが、全員、投薬、シップ等の治療を受けていて、「アイロン体操」紙一枚だけの治療を受けた

人はいなかった。

もちろん症状にもよるのだろうが、紙一枚で、私の肩の痛みが完治すると見抜いたあの老先生は隠れた名医だったと、今でも思っている。

Y整形外科は、その後、息子の代になり、近代的リハビリルームを併設した大きな医院に改築された。あの魔法の紙は息子に引き継がれているのだろうか。

人生の名言・名句を味わう

森 眞彦

新聞やテレビを見ても暗いニュースが多く、明るい話題の少ない昨今である。先人が遺した名言・名句には、その人の人生と英知が凝縮されており、現代に生きる私たちの生きる指針になるものが多い。人生に迷いを感じた時や仕事に行き詰まった時に勇気と知恵を与えてくれる。私にも心の杖にして苦難を乗り越えることができた名言がいくつかある。

気は長く心は丸く腹立てず

人は大きく己(おのれ)小さく

これは、漢字の書き方で処世訓、つまり世渡りに役立つ教えを説いた句である。気という漢字は縦に細長く書き、心という字は全体が丸くなるように書き、腹という字は寝かせて横向きに書く。人という字はそのまま大きく書き、その下に己という字を小さく書く、ということである。「言うは易く、行うは難し」かもしれない。

やってみせ言つて聞かせてさせてみて

褒めてやらねば人は動かじ

太平洋戦争の頃、海軍大将であった山本五十六が残した有名な言葉である。先にたつて模範を見せる。言葉にして説明する。実践させる。最後に、褒めることでやる気を引き出す。そのようにして、人は初めて立派に行動できるようになる。この言葉には人材育成で大切なことが凝縮されている。四つのステップの実践で相手の成長を促すことができる。

おきな児がしだいしだいに知恵づきて

仏に遠くなるぞ悲しき

生きとし生けるものは皆、仏教という仏性(ぶつ

しょう)、言わば、きれいな心を持っている。現代人はさておき、昔の人は、子どもはみんな神さまや仏さまから授かるものと考えていた。子どもはみんな、きれいな心を持って生まれてくるのであるが、大きくなるにつれ、いろんな知識や知恵を身につけて変貌していく。江戸時代に生きた禅僧、良寛さんは「子どもはみな正直で神仏と同じ」とつねづね言っていたという。

形見とて何か残さん春は花

夏ほととぎす秋はもみぢば

この句は良寛さんが残した辞世の句といわれている。若い頃にふるさと越後を後にして諸国行脚の旅に出た。四十歳で帰郷してからも清貧に生きた。最晩年に詠んだとされるこの句は「私が死んだ後に残すものとしてありませんが、あるがままの四季折々の美しい自然を愛でて、そしてその中にあるこの世の真実の姿を感じてください」といった意味なのだろう。自然を愛し、自然とともに生きた良寛さんらしい句である。

このような名言・名句を多くの人に語り継いでいきたい。名句を口ずさむのは気持ちよく、とりわ

け五七五七七の短歌の形の句は覚えやすく気持ちのいいものである。いろんな環境のなかで人生を支えてくれる自分なりの名言・名句を持ちたいものである。

シヨールンジャー

第七話 サンタはだれ？

作 森と泉

マーくん、サマンサ、たかし、さっちゃんは小学生四人だけのソフトボール部です。でも、またの姿はシヨールンジャー。四人は今日も知恵と勇気で活躍します。

クリスマスイブです。今夜は施設でクリスマス会があるので、シヨールンジャーの四人は行ってみることにしました。

雪が今ちようどやんだところです。

施設の中は大騒ぎです。

「大変です。サンタがやってきてすぐに帰ってしまいました。プレゼントを車にとっさり積んで。お礼を言いたいで誰かサンタを探してーシヨールンジャーがいてくれるといいんだけど。」

ちようど玄関にやってきた四人が言いました。

「シヨールンジャーはここにいますよー」

サマンサは言いました。

「ちよつと車を拝見します。おや？何かを貼った跡があるわ。」

「指の跡と・・・これは爪かしら？」

マーくんとさっちゃんは施設の外で雪に残った跡を調べています。

「建物の外に帰った人の足跡は見当たらない。」

たかしが大きな声で言います。

「サンタはまだこの建物の中にいるー」

さっちゃんが言います。

「車を運転するみなさん、車に貼るバッジを持っていたらちよつと見せて下さいな。」

みんなは、初心者マーク、高齢者マーク、身体障害者マーク、聴覚障害者マークなどを差し出しました。

「お姉さんがサンタですね！ バッジの跡と長い爪で分かりましたよー」

「どうして分かったの？私、お礼を言われるの、苦手なんです。」

「お姉さんサンタで良かった。だいたい、かっこう見れば分かるじゃん？」

施設の男の子は、お姉さんがサンタの服を着ていたので、初めからきつとそうだと思っていたようです。

お姉さんがひとりひとりにプレゼントを配ります。

「メリークリスマスー良い子にはプレゼントをあげましょう。」

「ありがとう。」

お姉さんは「ありがとう」と言われるのが苦手なので、大汗をかいています。

「お姉さんサンタ、がんばれー。」

古稀を迎えて、拓く扉

山下 一馬

私は昨年11月に古稀を迎えた。杜甫の詩「曲江」に「人生七十古来稀なり」とあるが、今や男性の平均寿命は81歳、健康寿命は72.5歳とされ、70歳まで生きることがもはや稀ではなくなった。それでも「いつまで健康でいられるか」が、これからの課題のように思う。これからのことを案じる前に、これまでの歩みを振り返ってみると、一番楽しかったのは高校時代だった。仲間とギターでフォークソングを歌い、ESS部に所属して「何か面白いことをやろう」と英語劇『銭形平次』を上演した。目一杯楽しんだ結果、大学入試は全敗。浪人時代の一年間は、人生で一番勉強した時期だったと思う。大学に入ってからESSに所属し、ディベート（賛成側と反対側に分かれ、どちらの主張がより理にかなっているかを競い、審判が判断する競技）に没頭した。授業はほどほどに、ディベート大会に明け暮れる毎日

史や文化にも関心を持ち、ガイドクラブや郷土づくり推進協議会に参加して地元案内・PR活動にも携わっている。孔子は『論語』の一節で、七十歳を「從心（じゅうしん）」（心の欲する所に従えども、矩を踰えず）と表している。好奇心の赴くままに生きていくつもりではあるが、節度を保っているかどうかは自信がない。まあ、誰かの役に立つことができればそれで良いのかもしれない。一方で、「老い」とは何だろうか。75歳、80歳、85歳と節目を迎えるたびに、体力の衰えを感じると言われる。竹内まりやの「人生の扉」では、「歳を重ねて弱っていくのは悲しいこと」「老いていくのは辛いこと」「人生には何の意味も無いのよ」と歌われているが、結びのフレーズでは「それでも私は、生きることには価値があると信じている」とある。これからの10年、ひょっとして20年、老いに抗わず、心の赴くままに、自分でできることを続けていく。それが何より大切なことなのではないかと思う。

だった。その結果、就職活動期を迎えたときには「優」（A評価）の数が少なく、大手商社や都市銀行はすべて不採用。そんな折、ディベート大会で競い合った他大学の友人から「外資系の銀行が募集している」と教えられ、面接を受けることになった。日本人の人事部長は、いきなり英語で「君は大学で何をしましたか？」と質問してきた。私はディベートの面白さや大会での戦績について話したが、面接の最後に「単なる英語屋はいりません。英語で仕事ができる人を求めています」と言われ、落胆して帰った。ところが数日後に連絡があり、結局外資系銀行で4年以上働くことになった。銀行員らしからぬ仕事ぶりだったかもしれない。1985年のプラザ合意以降はディールングルームで外国為替業務に携わり、その後はデリバティブ（金融派生商品）の営業としてアジア市場を駆け回り、2017年に退職した。退職翌日からは、生活リズムを変えず早朝の散歩を始めた。毎朝顔を合わせる先輩に「しばらくは充電期間として何もせず、徐々にやりたいことを見つけてなさい」と言われ、やがてインバウンド旅行者の通訳ガイドを始めた。その後、藤沢の郷土

Nコンの思い出

山田 節子

猛暑に負けてしまいそうな日の午後だった。BSから爽やかな歌声が流れてきた。秋に開催されるNコン（NHK全国学校音楽コンクール）の県代表を組む小学生達が、歌の練習に先だって、入念な体力作りから始まり、スポーツ選手さながらの筋力トレーニングなどに励む姿に、思わず釘付けになってしまった。

一九三二年に小学生対象に始まったNコンも、現在は小中高生が夫々「合唱日本一」を目指す大会として発展し、今年六十周年を迎えたのだそうだ。課題曲の中には、教科書に加えられ、広く歌いつがれているものも多いが、「花のまわりで」は、その一つである。

これが課題曲だった一九五五年、私は挑戦する合唱部の一人として参加していた。今でも、ふと口吟む自分に驚くことがあるが、あの夏休みの鍛練の

賜物かもしれない。私は小学校時代を山口県宇部市ですごしたが、戦後の復興期にあつて、工業地帯として空気の汚れた地域として知られていた。しかし、戦禍を免れた音楽堂（渡辺翁記念館）があつて、来日する著名な演奏家達が、「東京の次は宇部に」と、挙つて来訪し、音楽に親しむ機会には、恵まれていたようだ。

音楽室は怖い顔の作曲家の肖像画がグランドピアノを囲むという雰囲気だった。教頭先生が上野の音楽学校出身の方で、厳しかったけれど練習の合間に話された音楽の話題は子供心にもすっかり記憶されるものだった。

県代表になる夢は叶わなかったが、時折、学校放送の番組収録のため、電車に乗ってNHKの放送局まで出かけた思い出もある。テレビも、テープレコーダーも、身近にはない時代だった。

先年、卒業四十周年を祝う会に、はるばる出かけた。久々に会えた当時の仲間たちは再会のよろこびを伝えあうのもそこそこに、歌い始めたのである。勿論はじめは、課題曲だった、「花のまわりで」、「峠路」、「羊」。笑顔と歌声が時のたつのを忘れさ

せるような会になったのも、夏休みを返上して夢中ですごした時間があつたからこそと思つた。今公民館の俳句サークルでは、季節の歌を投句と共にプリントして歌う習慣が生まれている。歌から美しい日本語を見つめるよろこびが会の長く続く力になっているようにも思える。

画面を通して出会つた子供達も、厳しい練習を通して育てた、歌う喜びをずっと育てていくのではないかという思いを深くしている。

天使の歌声

山田 武子

ウィーン少年合唱団が今年も来日した。

今年で来日70周年になるとTVで紹介していた。

30年位前に義姉に誘われて、横須賀芸術館に行った。

天使の歌声の少年25、26名の彼らは皆可愛い。日本人らしき少年も1、2名居た。

ウィーン少年合唱団に入る為には試験があり、合

格すると寮生活が始まるようだ。その寮は官殿の中にあるのだという。費用は相当かかるのではないかと考えていたが、年間100万円程度とのこと。寮費は別なのかは聞きそびれた。

変声期がくるとやむなく退会することになるようだ。彼らにとつては、変声期があるのは、残念なことだろう。寮の中では、学校の授業が行われていて、その合間に歌の練習がある様だ。親元を離れて寮生活をするのは、自立心が養われ、本人にとつても、良い経験になるということだろう。

この合唱団を退会すると、それまで通っていた学校に戻り、卒業後は音楽関係の仕事に就く人もいる様だが、一般の仕事に就く人の方が多いのだそう。

これからは少年だけでなく、少女合唱団も出て来てもいい時代がきているのではないだろうか？……ウィーン少女合唱団……なんてネ。

費用の安さは国が全面的にバックアップしているのだらうか？ 国技のように？ これからもウィーン少年合唱団の活躍を応援していきたいと思つた。

近場で来日公演があれば、是非、天使の歌声を聴き

に足を選びたいと思つた。

青春のページ

山 成 健 治

晩年になった現在、自分の人生を静かに振り返ってみると、私の人生にも、少々、意外な出来事があった。

最初は、一九五四（昭和二十九）年、会社員であつた父が、防衛庁の職員に転職したことから、父の勤務地が山口県の下関市から、遠く北海道の旭川市に移動することとなったことである。このため、私は、下関市郊外の小学校から、北海道旭川市の小学校へ転校することとなった。

転校した小学校では、器械体操が盛んで、やがて私も、アクロバティックな器械体操に夢中になっていった。六年生になると、私どもの器械体操のことが近所でも評判となり、地元の新聞等にも取り上げられたことから、私は生まれて初めてテレビに出る

こととなり、嬉しさと同時に、「これは一層、頑張らなければいけない」と思った。

また、大学二年の時には「学費値上げ反対」の学園紛争が起こった。

当初は、私も反対派の一人であったのだが、やがて、学費値上げ反対の運動が「産学反対」を唱える思想運動に転化していったことから、私は反対運動を降り、学生側と大学側との意見調整を図る「有志会」を組織した。

最初は小さな組織であった「有志会」も、次第に賛同者が増え、大規模な組織になっていくと、私も「有志会」の意向を大学側も無視でなくなっていくた。

「有志会」の本意は、あくまでも「一般学生」の総意を代弁するいうものであった。そこで私どもは、「学生投票」を行なって、学生の意見の集約に努めた。その結果、予想した通り、学生の多数意見は、「産学反対」というような思想的なものではなく、マスプロ的な授業を極力、廃し、教師と学生との意思疎通を可能な限り密にしていこうという、ある意味では極めて平凡な、しかし一方ではまた、教育の

本質」に迫る革新的なものであったと言えるのかも知れない。

学生投票の実施後には、少人数による授業を始め、学生との意見交換や、学生同士による意見発表の場が拡大される等、少なくとも「一方通行」から「双方向」による授業の場が拡大されることとなった。

藤沢にナウマンゾウがいた

横 田 佳代子

昭和55年（1980年）、藤沢の天岳院で、ナウマンゾウの化石を発掘するというので、近所の子供たちと友達と一緒に駆け付けた。ナウマンゾウが日本に生息していたのは35万年前から、15万年前である。今回発掘しているのは、約13万年前のメスの化石で、全国でも珍しいほどの良い状態の化石であった。大学の教授の笑顔と、美しい外国の若い女性の研究者が、印象に残った。一生懸命化石を掘っていた。

この時の化石は「生命の星・地球」（小田原市博物館）に展示されている。

日本と大陸は、陸続きであった。氷河時代、石器時代の日本人は、ナウマンゾウを、食料としていた。

ナウマンゾウは、石器時代の終わりに絶滅した。気候の変動と、人間による狩猟が原因と言われている。

縄文式時代になった時、温暖期になり、海面が上がり、藤沢は海の中にあった。海の中の藤沢も、すてきです。

ナウマンゾウの化石が発掘された村岡東は最近特に発展している。

村岡文化センターが令和7年10月14日に完成。

湘南ヘルスイノベーションパーク（アイパーク）が、2018年武田薬品、三菱商事等により2018年に創立された。ノーベル賞受賞者山中伸弥教授も活躍されている。横浜国立大学も加わり、世界の頭脳が、集結するような予感がする。

村岡新駅が、2030年に完成。2005年に着工。

村岡には、平良文（村岡）が城主の村岡城があった。

この平良文は藤原秀郷に協力し、平安時代中頃活躍。平良文は、大武将で、藤沢、秩父をはじめ関東一帯を収めていた。秩父神社に、社殿を寄贈している。

平良文は、藤沢の二伝寺に眠っている。春には桜が満開となり、心をなごませてくれる。

藤沢も秩父の宮とご縁がある。

秩父宮は、鶴沼別邸に住まわれていた。

亡くなられた後、スポーツの宮として、親しまれたご遺徳をしのんで、「秩父宮記念体育館」を建設した。

秩父神社のゆかりの友人より、「神社新報」が送られてきた。天皇陛下は、令和7年5月24日から25日にかけて、第75回全国植樹祭開催にあたり埼玉県に行幸をされ、秩父神社にも行幸をされた。秩父神社御鎮座2100年式年にも行幸を賜った。

新聞の中に、「関東武士団の源流、平良文を祖とする秩父平氏」と掲載されています。

ナウマンゾウの発掘された、村岡東で大きな働きをされた、平良文に感謝しました。

一話一句

吉田 邦男

栗ご飯

友人から栗をいただいた。形の良いものを二〇粒ほど。家族で栗ご飯にして食べるのに丁度良い量だ。皮をむくのも苦にならない。スーパードで売られてゐるのは一キロ以上あり買つても持て余してしまふ。

お礼の葉書に俳句を添へてとを考えをめぐらす、なかなかまとまらない。山上憶良の歌「瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めば」を想ひだし、句に織り込まうとしたが旨いかな。だめだ、諦めやう。来週お会ひするので、口頭で栗ご飯にしておいしくいただきましたと礼を述べることにした。

栗の俳句は疾うに忘れた頃、たまたまひらいた漢

和辞典のページに「愛」の字をみつけた。いくつかの読みがあり、そのなかにひらめくものがあつた。そして急に句が浮かんだ。栗をいただいてからひと月半ほど経つてゐた。

栗ご飯 憶良の歌を愛でながら

温石

「あ、血管が切れて出血した」「先生バイタルが下がりがり続けてゐます」「先生どうしますか?」「もうだめだ、兎に角出血を止めろ、もうインオベにする。すると、軽快なメロディーとともにドクター大門未知子登場「わたし失敗しないので」すぐに適切な処置をして手術成功。よかつた」

昨夜からの雨は午後になつてもやむ気配がない。この雨が冬を連れてくるのだらう。録画したドラマに飽きたので紅茶でも飲むことにする。熱い紅茶にウキスキーを一滴。いい香りなのでもう少し。しまつた！少しのつもりが入れすぎたやうだ。これではウキスキーの紅茶割りだ。ホッコリ！お陰で温まつてきた。むかし、禅僧が焼いた軽石を布に包んで身

体を温めたと云ふが、温かいものを口にするとはつとする。ひとはお腹が温まると元気になるものだ。そして懐が温まるとつと元気になる。

温石のごときウキスキーに憩ふ

壺中の天

NHKテレビの番組「美の壺」で進行役の草刈正雄が居る和室の掛軸に「壺中の天」とある。壺中の天とは、中国後漢の学者費長房（ひちようぼう）が、市中で壺を売る翁が売り終ると壺の中に入るのを見て、頼み込んで一緒に入れてもらった。中には立派な建物があり美酒、佳肴が並んでゐたのでともに飲んで出てきたと云ふ故事。ひとつの小天地、別世界。または、酒を飲んで俗世を忘れる楽しみを表す語句である。一壺天とも云ふ。

昼食会の幹事を引き受けた。店を電話で予約し、後日下見を兼ねて訪ねた。十人ほどだが狭くて良いから雑音が聞こえない個室をと頼んだ。同好の友と一時、小天地ならぬ狭個室で愉しく過ごせたら幸ひである。

花冷えに壺中の天のご憩ふ

落花

桜が散り始めた。今年は四月初めに開花を迎へて桜花の下での入学式となつたやうだ。桜が散る様子を云ふ語に花吹雪があるが、近ごろ「花くたし」や「花散らし」と云ふ語を耳にする。花くたしは、「卯の花腐し」が正しく、陰暦四月から五月に降る雨、梅雨に先立つて降る長雨、五月雨のこと、また、花散らしは九州北部地方で三月三日を花見とし、翌日若い男女が集会して飲食することださうだ。しかし、言葉は時とともに変化する。咲いた花に降る雨を「花くたしの雨」「花散らしの雨」と誰もが云ふやうになる日は遠くないと思ふ。

「だるまさんがー」誰もうごかず花吹雪

編集後記

俳句の部

堀口 みゆき

「文芸ふじさわ」の編集に携わってから、早や十五年の歳月が流れました。編集を引き継いだ頃には東日本大震災があり、不安のつの中、俳句が心の支えになっていた方も少なくなかったと思います。「文芸ふじさわ」に投句される方々も様変わりしました。自分もいつの間にか高齢者となり、政治や経済を含め、世の中は急速に新しい時代へと変貌しつつあります。

昨今の俳句ブームの影響もあってか、今回は百四十四名のご応募がありました。分析してみますと、いろいろな偏りが見られます。個人的に作句している方の応募は少数にすぎず、多くの投句者は結社や俳句サークルに属し、配布された案内パンフレットによって情報を得た方々です。

俳壇全体に見られる現象として、特に若い層には、結社に属さず自由に句を作りたい、紙媒体ではなくウェブを使って句会を開いたり発表したりしたい、古い形に縛られたくない、という思いがあります。伝統を重んじる方から見れば受け入れがたいことかもしれませんが、どのような手段であっても、日本独自の文化が後世に残る

短歌の部

加藤 和彦
鯨島 美和子

2025年も暮れようとしています。開催前には何かと議論を呼びました関西万博も、好評のうちに閉幕しました。政界史上初の女性総理の誕生、その他にも、熊による被害拡大・古古古米等々話題の尽きない年でありました。

そうした下での「文芸ふじさわ」第60集短歌の部、応募者の減少を少なからず懸念しておりましたが、どうやら59集同様の(24名↓25名)応募者がありほっとしております。

内訳は59集から継続応募者16名、60集に新たに応募された方が9名、60集には応募されなかった方が8名、との状況でした。

又、60集に応募された方で、「文芸ふじさわ」に登録された三団体所属の方が13名、それ以外の会、あるいは個人の方が12名でした。

「文芸ふじさわ」のこのような状況を踏まえて、近頃の短歌界のありようをネットで調べてみました。すると現在ではZ世代に於いて、「まさに短歌ブーム」である、とのことでした。

(Z世代とは、現在12歳から28歳の若者、いわゆるデジタルネイティブ、つまり生まれながらにスマホやSNS

のであれば、それは進化と呼ぶべきではないでしょうか。先般、湘南日独協会からのご依頼を受け、俳句の国際化について講演させていただきました。なぜ文芸の中で、俳句が世界中の国々で作られるのかという話から始まりました。外国人は、作品を流れては無く、切り口をとらえる無駄のないシンブルさに惹かれるのかもしれない。海外詠には無季の句が多いのですが、四季に恵まれている点では、日本が最も豊かな環境にあると思います。日本人独自の感性は、日本の自然がもたらすものとも言えるでしょう。芭蕉の有名な「古池」の句を見ても、蛙は一匹なのか、たくさんいたのか、「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」の蟬は一匹なのか、それとも多くいたのか、正岡子規が詠んだ法隆寺の鐘の音と西洋の鐘の音の違いなど、日本人の持つ侘び・寂びの精神性は独自のものがあります。

外国語で作られた俳句は、言語の違いにより五・七・五にはなりません。日本語に翻訳して初めて五・七・五になりますが、それでは原作者の意思とはかけ離れたものになるのではないかと疑問が残ります。一番良いのは原作者の本意を理解することですが、翻訳者の感性も影響するため、このあたりが難しいところだと思います。

いづれにしても、日本文化が国際的に海外へ浸透していくことは、たいへん喜ばしいことです。そこには、音楽や絵画に見られるような、国を超えた共通の感動や、ジャンルを超えた目に見えない共通の存在があるのかもしれない。

に慣れ親しんでいる世代のこと)

成長期であり悩み多き世代にあって、自らの思いを打ち明けたり、共感を得るための格好の手段であるようです。口語体の表現により意味がとりやすくなっていることが、ブームの鍵となっている、とのことです。

さて、それでは「文芸ふじさわ」を介して短歌を楽しむ我々は、いかなることになりましょうか。そうですネー・平凡な毎日をごす中で、歌を詠むことが時々メロリハリになる

・短歌の会における、会員の皆さんとのやり取りで新たな発見があり脳が活性化する
等々、各自各様、それぞれに想いがあるものと思われる
ます。

60集で終わることなく継続して楽しみ、応募されることを期待いたします。

編集委員より 応募者皆様へ、次の点について注意してくださいようお願いします。

仮名遣い(新・旧)の欄に丸印をつけ、どちらかの仮名遣いに統一してください。
今回気になったのは、促音便「っ」。旧仮名の場合「っ」は大きく書きます。

例「笑った」↓「笑った」 「いっぱい」↓「いっぱい」

川柳の部

宮塚 肇

今年は、四十七名の方から応募をいただきました。文芸ふじさわは、今年で六十集となり人間の年齢なら還暦というめでたい区切りの発刊となります。この機会に、川柳を中心にその発端を探ってみました。

第一集（一九六六年）に掲載された応募作品は、短歌と俳句のみでした。当時、俳句と短歌は、市の文芸団体として個別のグループ活動や大会が活発に行われていたようです。発刊の辞として教育長の若月芳夫氏は「文芸活動をする市民に交流の場の提供と市民の鑑賞に供する」と述べられ、そして、表紙の題字は、藤沢市長の金子小一郎氏の書で、市としての意気込みを感じさせます。

また、藤沢市俳句協会長の田中喜八郎氏は、発刊に寄せる一文の中で「他都市にはみられない行政当局による発表の場は待望久しい喜ばしいもので市民全体の喜ぶべきこと」と記述されています。

川柳の応募作品が初めて掲載されたのは第九集（一九七五年）です。十の課題について三句ずつ、十人余りの方からの応募作品が掲載されています。『白バイの三億円は今いずこ（晴風）』、『開発で少なくなった虫の声（美美）』、『かまきりもウー・マンリブに脱帽し（三三子）』と当時を思い起させる作品があり、また今と変わらぬ物価高の文言も散見され、川柳ならではの時代を反映させる内容

に興味をそそられます。川柳の編集を担当された田上光村氏は、藤沢市の川柳の始まりは昭和二十三・四年頃、片瀬や鵜沼の海の家を使って始められたこと、ふじさわ川柳会が年に一回開催されていること、六会市民センター講座が開催されたことを記述されています。

文芸ふじさわも還暦を過ぎ、古希、喜寿、傘寿……と集を重ねていくことでしょう。今後、文芸としての川柳の魅力を市民一般に広く広めることが我々に課されているのを感じます。

五行歌の部

鈴木 春野

第60集へのご投稿、ありがとうございました。

五行歌は普段生活する中で全ての事象やそれらへの自分の想いをテーマに詠めますから、その時々々に気軽に書き留めて、日記代わりの生活の記録にもなります。自分の歌の記録を遡りますと「あの頃こんなことを考えていたのか」と、懐かしくその当時を思い出すという個人的な意義や楽しみにもなります。

また、この60集の五行歌作品の一つずつを読んでみると「そうそう」と共感したり「へー面白い感じ方だね」と新鮮に感じ味わうこともできますように、他の人の歌との出会いも良い刺激になります。

そういう機会が歌会です。五行歌の歌会では本当に自由に歌への感想や自分の意見を交わし合います。それが楽しく女性会員の多くが「色々な面白い事ややって来たけど、こんなに続いているのは五行歌だけ」と言います。時に歌作りは大変ですし、点が低い時もあるのに、なぜ歌会を楽しんでいるのでしょうか？

- ① どなたかしらが共感したり、褒めてくれる。
- ② 作者の思いが大事、と添削がなく個性が尊重される。
- ③ 自分の歌作りへのヒントや刺激を受ける。
- ④ 歌だけではなく、歌を通して様々な話が出て来て毎回何かしらを学べる。

等が考えられます。一回の歌会で数えきれないほど談笑し合いますから、誰もが「家にいたのではこんなに笑うことはない」とおっしゃいますし、歌会后、参加者皆が笑顔で帰路につきます。

年齢を重ねて、心身ともに健康であることが益々大切になって参ります。外出や人との交流はとても大事で、身嗜みを整えたりコメントの発言は適度な緊張にも繋がります。歌作りと共に脳を刺激していると思います。

コロナ禍で会員が集っての歌会が出来ず「紙上歌会」という形が続いた経験からも、皆が参集、対面しての通常歌会の楽しさ、有難さを実感しており、馴染んだ市民会館に暫く通えないのはとても残念ですが、会場を代えて楽しんで行きたいと思っています。

現代詩の部

山田 美智子

「文芸ふじさわ」第六十集を皆様のお手元にお届け出来る事に感謝申し上げます。また、還暦に値する歴史を紡がれてこられた事に、紙面を借りてお祝い申し上げます。先達の長谷川富貴様の文芸への深い造詣や、市民の皆様の方芸を慈しみ育成して来られた賜であると思うと感慨深いです。

今集の作品からひとこと参りましょう。「カンナ」、鎌倉駅北の横須賀線の真つ赤なカンナは、映像にみる鮮やかさなのでしょう。カンナは句会や詩にも彩りを添えますね。茨城のりこさんの「根府川の海」に綴られたカンナもひと味あります。「ふゆのひ」は親子の温もりを「みどりのてぶくろ」に感じました。終連の二節が秀逸です。ゆつくり音読し、味わいましょう。「すいとうとほく」は四歳のぼくとママの会話から掬い上げ生まれた作品。「すいとう」は、おもちゃも入る便利な物で、どこにでも持ち運び出来るそうですね。「ロマンティックでなくていい」日々の暮らしに、お互いがどれほど大切な存在であるかを気づかせてくれる作品です。「誰も知らない」は、人は幸せの中にいる時、しあわせの有り難さに気づきにくいものです。突然の喪失感に見舞われた時、相手の存在がどれほど大切であったかに気づかれます。人生は立ち止まり、振り返り、今もこれからも、しっかりと生きて

行く事ですね。「幻想世界」、作風が少し変わりましたが。朝の絵画的な景色が、遮断機の音で現実に戻される。大いにありますね。

「プリズムと偏光板」は、四季折々の移りや人間の喜怒哀楽は、あつたほうが良いですね。争い事の多い世界に、平和の偏光板は欲しいものです。「正義の解体」、「解体」は壊す意味を示します。正義が壊れた社会の中では、私たちの生命の存続が危ぶまれます。時代と共に社会的倫理感が揺らぎ、心理的に不協和音が聞かれそうです。現代社会の過多情報やグローバル化した情報に流され易い今こそ、人として良識ある行動が大事です。「夜明け前」は、太陽が沈む空は暗くなり、太陽が昇る前の空は白みかけ、明るさを取り戻す。「朝」は重い闇からの解放ともいえ、希望の光ともいえます。「冴えた空」、万華鏡はとも不思議で魅力的な言葉のひとつです。光のあり方で色々変化します。私たちは、自然の恵みの中で、生かされている存在です。作者の感じる空の奥は、心の平静を保つ世界なのでしょう。「流し」は、作者の貴重な思い出といえる母親の姿が、家族の暮らしを支えるご自身に重ねられた逞しい作品。

どれもすばらしい作品です。皆様、これからも書き続けて下さい。継続は力なり。次集でまたお会い致しましょう。

随筆の部

市川 光治

今回送付された随筆は、旅行記、過去の思い出、歴史に関する考察、感想文などに分類されました。

旅行記はその土地の風景が浮かび上がり、興味深く読みました。知らない土地のことを知るのには楽しいものです。自分の知識が増える喜びでしょうか。

過去の思い出については、楽しかったこと、苦しかったこと、後悔すること、など熱い思いが伝わってきて面白く読ませてもらいました。

歴史に関するものは、書き手の知識や経験に基づいた考察が深く、論考として読ませてもらいました。過去の読書量の多さがしのばれ、読み手はその知識の一端を分けて貰えるわけです。

感想文は素直に感じたことを書かれていました。そこに皆様の個性を感じました。

全体的には、書き手の情熱の強さが文章に自然に表れているものや、逆に筆を抑えて内に秘めた思い入れの強さを感じさせるものがありました。どちらの方向で書くのかは、書き手の自由です。題材により自分で選択することになります。

題材が浮かんだらメモに書きとめておくのがいいかもしれません。書きとめた時には大したものとは思わなく

ても、時間をおいてメモ類を見返してみると新しい発見があるものです。漬物が重しの下で熟成するように、題材がこなれて成熟していくのです。

吉田兼好の昔から、徒然なるままに書きとめるのが随筆なのであり、身辺雑記ということなのですが、ただ書くのではなくおのずと取捨選択がなされて出来上がるものと思います。その取捨選択に個性が現れます。その個人の選択したものが、読む者の心をとらえるのですから、個性が普遍的なものに昇華しているのだと思います。なにせよ、まず書き始めれば良いのです。

【俳句】

団 体 名	代表者名	会員数	集 会 日	場 所
さ ち の 会	高瀬俊次	8人	毎月第2木曜日	橘市民の家
香 坊 句 会	柴山 洋	13人	毎月第2土曜日	カフェ香坊
白南風句会	渡部 喬	13人	毎月第3木曜日	藤沢市役所 市民利用会議室
さ ら 例 会	神谷 章夫	15人	毎月第3土曜日	F プレイス

【短歌】

団 体 名	代表者名	会員数	集 会 日	場 所
新青虹藤沢短歌会	久保井 収	12人	毎月第3日曜日	辻堂公民館 辻堂市民図書館
花 舟 短 歌 会	原 けい子	30人	毎月第2・第4火曜日 毎月第2・第4水曜日	善行公民館 明治公民館
なぎさ短歌会	加藤 和彦	11人	毎月第3火曜日	湘南なぎさ荘

★サークル紹介★

(2025年11月現在)

【俳句】

団 体 名	代表者名	会員数	集 会 日	場 所
一葦湘南句会	相澤 陽子	20人	毎月第1土曜日	藤沢市役所 市民利用会議室
一葦藤沢句会	中根 美保	16人	毎月第2火曜日	藤沢市役所 市民利用会議室
くくだち句会	原山テイ子	13人	毎月第3木曜日	湘南台図書館
鷹辻堂俳句会	堀口みゆき	-	毎月第2/第3木曜日	吟行(第2木曜)/辻堂 市民図書館(第3木曜)
たけのこ会	永井かほる	13人	毎月第2木曜日	藤沢市役所 市民利用会議室
天為湘南俳句会	内 藤 繁	70人	毎月第3日曜日	藤沢市民会館他
波 藤 沢 例 会	山田 貴世	35人	毎月第4水曜日	藤沢市役所 市民利用会議室
はこべ俳句会	加藤 静子	12人	毎月第3木曜日	鶴沼公民館
冬すみれ会	鈴木 絹子	8人	毎月第1日曜日	済 美 館
む か ご 会	齋藤まり江	17人	毎月第1・第3水曜日	済 美 館
無 名 の 会	神谷 章夫	15人	毎月第2日曜日	吟 行
サンシャイン句会	堀口みゆき	-	毎月第1金曜日	藤沢市市民活動 推進センター
は ま べ 句 会	堀口みゆき	-	毎月第4日曜日	辻堂市民図書館
みちくさ俳句会	大山 賢太	10人	毎月第1土曜日	藤沢市市民活動 推進センター
かわせみ俳句会	大山 賢太	10人	毎月第2水曜日	藤沢市市民活動 推進センター
かるがも俳句会	大山 賢太	10人	毎月第4金曜日	ラポール城南
木犀ミモザ会	大平 雅芳	15人	毎月第1土曜日	湘南台図書館

～ ご協賛ありがとうございます ～

文芸ふじさわは、市民文芸の活動を盛り上げるため、長年にわたり発行しております。

文芸ふじさわ第60集発行にあたり、市内の団体・法人の皆様、個人の皆様からご協賛を賜りました。

皆様からの温かいご支援に心よりお礼を申し上げますとともに、今後とも本事業へ変わらぬご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

団体・法人ご協賛ご芳名 (敬称略 五十音順)

有限会社 アート稲元
さ ら 俳 句 会
合資会社 関水スポーツ
辻 堂 川 柳 会
有限会社 豊 元 書 店
波 俳 句 会

個人協賛ご芳名 (敬称略 五十音順)

青 木 敏 行	小 池 貴 瓊 子	西 野 洋 司
あ や 子	幸 葉	ヒラサワタカシ
今 井 美 恵 子	塩 崎 麗 子	廣 崎 龍 哉
上 松 マ リ	白 石 多 美 子	三 浦 節 子
オウミタカリン	森 童	山 下 巖
大 澤 清 水	多 美 子	横 田 佳 代 子
加 藤 弘 子	富 安 千 鶴 子	
神 谷 章 夫	戸 村 忠 子	他 12 名

【川柳】

団 体 名	代表者名	会員数	集 会 日	場 所
六 会 川 柳 会	小野 敬子	11人	毎月第2・第4火曜日	六 会 公 民 館
鶴沼川柳同好会	宮 塚 肇	7人	毎月第2・第4土曜日	鶴 沼 公 民 館
辻 堂 川 柳 会	大久保近下	11人	毎月第3土曜日	辻 堂 公 民 館
湘南台川柳会	熊田 松雄	26人	毎月第4金曜日	湘南台公民館
生きがい川柳同好会	森本 生雄	7人	隔月1回・不定期	生 き が い 就 労 セ ン タ ー
川柳こぶしの会	松下 協一	11人	第 3 木 曜 日	こ ぶ し 荘

【五行歌】

団 体 名	代表者名	会員数	集 会 日	場 所
藤 沢 日 曜 歌 会	橋本 圭子	21人	毎月第1日曜日	藤 沢 市 民 会 館
藤 沢 火 曜 歌 会	新井 文子	12人	毎月第3火曜日	藤 沢 市 民 会 館

【随筆】

団 体 名	代表者名	会員数	集 会 日	場 所
て っ せ ん	神部ゆかり	6人	毎月第2木曜日	明 治 公 民 館
文 芸 光 風	渡 辺 準	10人	毎月第1・第3火曜日	湘南大庭図書館
は ま ゆ う	篠原 貴子	5人	不 定 期	長 後 公 民 館

第60集編集委員

俳句	堀口みゆき
	渡部有紀子
短歌	加藤和彦
	鮫島美和子
川柳	宮塚肇
五行歌	鈴木春野
現代詩	山田美智子
随筆	市川光治

文芸ふじさわ 第60集

発行 藤沢市

(公財) 藤沢市みらい創造財団

問合せ (公財) 藤沢市みらい創造財団

芸術文化事業課

藤沢市鶴沼東8-1(藤沢市民会館内)

TEL 0466-28-1135

FAX 0466-25-1525

編集 文芸ふじさわ編集委員会

発行日 2026年(令和8年)2月28日

印刷所 (有)アート稲元

「無断転載を禁じます」

Imagination & Creation Design



有限会社 **アート稲元**

グラフィックデザイン
イラストレーション
キャラクターデザイン
サイン広告(看板)
セールスプロモーション
映像制作
WEBデザイン



お気軽にご相談ください

〒251-0002 神奈川県藤沢市大鋸1-9-3

Phone: **0466-25-4019** (代表)

E-mail: share@art-inamoto.co.jp (代表)

SEKIMIZU SPORTS

大会の盾、トロフィー及び記念品の

ご注文を承っております!

営業時間 10:30am ~ 8:00pm

月曜定休

住所: 藤沢市鵠沼石上 1-3-1

TEL 0466-26-3355

FAX 0466-26-3530

事務用品・書籍・教科書・紙製品

(有) 豊元書店

〒251-0052

藤沢市藤沢 1056 (外商部)

藤沢店 TEL 0466-26-2311

外商部 TEL 0466-26-5111

FAX 0466-27-1550

E-mail info@e-toyomoto.com

URL <http://www.e-toyomoto.com>

波 俳 句 会

個性の開花

主宰 山田貴世



